

354
4
839



始



特 211
569

塚本哲三編

通觀

增

鏡

讀

本

全



例 言

◇本書は、國語教科の教材として「増鏡」中から之にふさはしい條を選輯したものであります。

◇單に教材として適切なものを選んだといふだけでなく、歴史物語としての増鏡の全貌を保つて、首尾一貫その話の筋が正しく續くやうにした事は、編者として聊か苦心の存する所であります。

◇學生の自學自習を目標とした結果、句讀や振假名は一切之を廢し、且つ文題研究資料としてふさはしい様式を取る事と致しました。

目次

序	一	第十一	草まくら	八
第一	おどろのした	第十二	老のなみ	八
第二	新島守	第十三	今日のひかげ	九
第三	ふぢ衣	第十四	つげの小櫛	九
第四	三神山	第十五	うら千鳥	一〇
第五	内野の雪	第十六	秋のみ山	一四
第六	烟の末々	第十七	春のわかれ	一四
第七	おりゐる雲	第十八	むら時雨	一四
第八	山のもみぢ葉	第十九	久米のさら山	一五
第九	北野の雪	第二十	月草の花	一六
第十	あすか川			

通観 増鏡 讀本

序

【一】二月の中の五日は鶴の林に薪盡きにし日なればかの如來二傳の御かたみのむつまじさに嗟峨の清涼寺に詣でて常在靈鷲山など心の中に唱へて拜み奉る傍に八十にもや餘りぬらむと見ゆる尼一人鳩の杖にかかりて參れりとばかりありてたけく思ひ立ちつれどいと腰いたくて堪へがたし今宵はこの局にうちやすみなむ坊へ行きて御燈の事などいへとて具したる若き女房のつきづきしき程なるをばかへしぬめり

【二】釋迦牟尼佛と度々申して夕日の花やかにさし入りたるをうち見やりてあはれにも山の端近く傾きぬめる日影かな我身の上の心地こそすれ

とてより居たるけしき何となくなまめかしく心あらむかしと見ゆれば近く寄りていづくよりまうで給へるぞありつる人の歸り來むほど御伽せむはいかがなど言へばこのわたり近く侍れど年のつもりにやいと遙けき心地し侍るあはれになむと言ふさてもいくつにかなり給ふらむと問へばいさよくも我ながら思ひ給へわかれぬ程になむ百歳にもこよなく餘り侍りぬらむ來し方ゆく先例もあり難かりし世の騒にもこの御寺ばかりは恙なくおはしますなほやむごとなき如來の御光なりかしなど言ふも古代にみやびかなり

【三】年のほどなど聞くも珍しき心地してかかる人こそ昔物語もすなれと思ひいでられてまめやかに語らひつつ昔のこの聞かまほしきままに年の積りたらむ人もがなと思ひ給ふるに嬉しきわざかな少しのたまはせよおのづから古き歌など書きたるもののかたはし見るだにその世にあへる心地するぞかしといへばすげみたる口うちほほゑみていかでか聞えむ若かりし世に見聞き侍りし事はここの年頃にぬば玉の夢ばかりだにな

くおぼはれて何のわきまへか侍らむとは言ひながらけしうはあらずあへなむと思へる氣色なればいよいよいひはやしてかの雲林院の菩提講に参りあへりし翁の言の葉をこそ假名の日本紀にはすめれ又かの世繼がうまごとか言ひしつくも髪のおも人もあつかひぐさになれるは御有様のやうなる人にこれ侍りけめなほのたまへなどすかせばさは心うべかめれどいよいよ口すげみがちにてそのかみはげに人の齡も高く膽強かりければそれに随ひて魂も明かにてやしか聞えつくしけむあさましき身はいたづらなる年のみ積れるばかりにて昨日今日といふばかりの事をだに目も耳も臆になりて侍ればましていと怪しきひが事どもにこそは侍らめそもさやうに御覽じ集めけるふる事どもはいかにぞといふ

【四】いさ只おろおろ見及びし物どもは水鏡といふにや神武天皇の御代よりいとあららかにしるせりその次には大鏡文徳の古へより後一條の御門まで侍りしにや又世繼とか四十帖の草子にぞ延喜より堀河の先帝までは少しこまやかなる又某の大臣の書き給へると聞き侍りし今鏡には後一

條より高倉院までありしなめりまことや彌世繼は隆信朝臣の後鳥羽院の御位の御程までをしるしたりとぞ見え侍りしその後のことなむいとおぼつかなくなりける覚え給へらむ所々までものたまへこよひ誰も御伽せむかかると人に遭ひ奉れるもしかるべき御契あらむものぞなど語らへばそのかみの事はいみじうたどしけれど誠に事のつづきを聞えざらむもおぼつかなかるべければたえだえに少しなむひが事ども多からむかしそはさし直し給へいとかたはらいたきわざにぞ侍るべきかなかのふるき事どもにはなすらへ給ふまじうなむとて

おろかなる心や見えむます鏡ふるき姿にたちは及ばで

とわななかしいでたるもにくからずいと古代なりさらば今のたまはむことをもまた書きしるしてかの昔の面影にひとしからむところはおぼすめれといらへて

今もまた昔をかけばます鏡ふりぬる代々の跡に重ねむ

第一 おどろのした

【五】御門始り給ひてより八十二代にあたりて後鳥羽院と申すおはしましき御諱は尊成これは高倉院第四の御子御母は七條院と申しき修理大夫信隆のぬしの女なり治承四年七月十五日に生れさせ給ふ

【六】其の年の春の頃建禮門院后宮と聞えし御腹の第一の御子三になりたまふに位を譲りて御門はお給ひにしかば平家のひとぞうのみいよいよ時の花をかざし添へて花やかなりし世なればけちえむにももてなされ給はずまたの年養和元年正月十四日に院さへかくれさせ給ひにしかばいよいよ位などの御望あるべくもおはしまさざりしをかの新帝平家の人々にひかさされて遙なる西の海にさすらへ給ひにし後後白河の法皇御孫の宮たちわたし聞えて見奉り給ふ時三の宮を次第のままに思されけるに法皇をいといたう嫌ひ奉りて泣き給ひければあなむづかしとてゐてはなちて

四の宮ここにいませとのたまふにやがて御膝の上に抱かれ奉りていとむつましげなる御氣色なればこれこそまことの孫におましけれ故院の兒おひにもまみなどおぼえ給へりいとらうたしとて壽永二年八月二十日御年四にて位に即かせ給ひけり

【七】内侍所神璽寶劍は讓位の時必ずわたる事なれど先帝筑紫にゐておはしにければこたみ始めて三種の神器なくてめづらしき例になりぬべし後にぞ内侍所しるしの御箱ばかり還り上りにけれど寶劍はつひに先帝の海に入り給ふ時御身にそへて沈み給ひけるこそいと口惜しけれ

【八】かくてこの御門元暦元年七月二十八日御即位そのほどの事常のまなるべし平家の人々いまだ筑紫に漂ひて先帝と聞ゆるも御このかみなればかしこに傳へ聞く人々の心地上下さこそはありけめと思ひやられていとかたじけなし同年の十月二十五日に御禊十一月十八日に大嘗會なり主基がたの御屏風の歌兼光の中納言といふ人丹波の國長田村とかやを

神代より今日のためとや八束穂に長田の稻のしなひそめけむ

【九】御門いとおよすげて賢くおはしませば法皇もいみじうつくしと思さる文治二年十二月一日御書始させ給ふ御年七つなり建久元年正月三日御年十一にて御元服したまふ

【一〇】おなじき三年三月十三日に法皇かくれさせ給ひにし後は御門ひとへに世をしろしめして四方の海なみ静にふく風もえだを鳴さず世治り民やすくしてあまねき御うつくしびの浪秋津島のほかまで流れしげき御恵筑波山のかげよりも深し萬の道々にあきらけくおはしませば國に才ある人おほく昔に恥ぢぬ御代にぞありける中にも敷島の道なむすぐれさせ給ひける御歌かずしらす人の口にある中にも

奥山のおどろの下もふみわけてみちある世ぞと人に知らせむと侍るこそまつりごと大事と思されける程しるく聞えていといみじくやむごとなくは侍れ

【二一】建久九年正月十一日第一の御子四になり給ふに御位ゆづり申させ給ひており給ふ御年十九位におはします事十五年なりき今日明日二十ばかりの御齡にていとまだしかるべき御事なれどもよろづ所せき御ありさまよりはなかなかやすらかに御幸など御心のままならむとにや世をしらしめす事は今もかはらねばいとめでたし

【二二】鳥羽殿白河殿なども修理せさせ給ひて常に渡りすませ給へどなほ又水無瀬といふ所にえもいはずおもしろき院づくりしてしばしば通ひおはしましつ々春秋の花紅葉につけても御心ゆくかぎり世をひびかして遊をのみぞし給ふ所がらも遙々と川にのぞめる眺望いと面白くなむ元久の頃詩に歌をあはせられしにもとりわきてこそは

見わたせば山もとかすむみなせ川ゆふべは秋となに思ひけむ

【二三】茅葺の廊渡殿などはるばると艶にをかしうせさせ給へり御前の山より瀧落されたる石のたたずまひ苔深きみ山木に枝さし交したる庭の小

松もげにげに千世をこめたる霞の洞なり前栽つくるはせ給へる頃人々あまた召して御遊などありける後定家の中納言いまだ下臈なりける時に奉られける

あり經けむもとの千年にふりもせでわが君ちぎる嶺のわか松
君が代にせき入るる庭をゆく水の岩こす數は千世も見えけり

【二四】今の御門の御諱は爲仁と申しき建久九年三月三日御即位十月二十七日御禊十一月二十二日は例の大嘗會なり元久二年正月三日御冠したまひていとなまめかしくうつくしげにぞおはします御本性も父御門よりは少しぬるくおはしましけれど御情深う物のあはれなど聞し召し過ぐさずぞありける

【二五】今の攝政は院の御時の關白基通の大臣その後後京極殿良經ときこえ給ひしいと久しくおはしきこの大臣はいみじき歌の聖にて院の上同じ御心に和歌の道をぞ申し行はせ給ひける文治の頃千載集ありしかど院

いまだきびにはおはしまししかばにや御製も見えざるを當帝位の御程にまた集めさせ給ふ土御門の内の大正の二郎君右衛門督通具といふ人をはじめにて有家の三位定家の中將家隆雅經などにのたまはせて昔より今までの歌をひろく集めらるおのおの奉れる歌を院の御前にて自らみかき整へさせ給ふさまいと珍しくおもしろしこの時も先に聞えつる攝政殿とりもちて行はせ給ふ

【二六】この撰集よりさきに千五百番の歌合せさせ給ひしにも勝れたるかぎりを選ばせ給ひてその道の聖たち判じけるにやがて院も加はらせ給ひながらなほこのなみには立ち及びがたしと卑下させ給ひて判の詞をば記されず御歌にてまさり劣れる志ばかりをあらはし給へりなかなかいと艶に侍りけり

【二七】上のその道をえ給へれば下もおのづから時を知るならひにや男も女もこの御代にあたりてよき歌よみ多く聞え侍りし中に宮内卿の君とい

ひしは村上の御門の御後に俊房の左の大正ときこえし人の御末なればはやうはあて人なれどつかさあさくてうち續き四位ばかりにて亡せにし人の子なりまだいと若き齡にてそこひもなく深き心ばへをのみ詠みしこそいとありがたく侍りけれ

【二八】この千五百番の歌合の時院のうへのたまふやうこたみは皆世にゆりたるふるき道のものどもなり宮内卿はまだしかるべけれどもけしうはあらずと見ゆめればなむかまへてまろが面おこすばかりよき歌つかうまつれとおほせらるるに面うち赤めて涙ぐみて候ひけるけしき限りなきすきの程もあはれにぞ見えける

【二九】さてその御百首の歌いづれもとどりなる中に

薄く濃き野邊のみどりの若草にあとまで見ゆる雪のむら消え
草の緑のこきうすき色にて去年のふる雪の遅く疾く消えける程を推しは
かりたる心ばへなどまだしからむ人はいと思ひよりがたくやこの人年積

るまであらましかばげにいかばかり目に見えぬ鬼神をも動しなましに若くて亡せにしいといとほしくあたらしくなむ

【二一〇】かくてこの度撰ばれたるをば新古今といふなり元久二年三月二十六日竟宴といふ事春日殿にて行はせたまふいみじき世のひびきなりかの延喜の昔おぼしよそへられて院の御製

いそのかみふるきを今にならべ來し昔の跡をまたたづねつつ
攝政殿

しきしまや大和ことばの海にして拾ひし玉はみがかれにけり
つぎつぎずむながるめりしかどさのみはうるさくてなむ

【二一一】何となく明け暮れて承元二年にもなりぬ十二月二十五日二の宮御かうぶりし給ふ修明門院の御腹なりこの御子を院限りなくかなしきものに思ひ聞えさせ給へればになくきよらをつくしいつくしうもてかしづき奉り給ふ事なめならず遂におなじき四年十一月に御位につけ奉り給ふ

もとの御門今年こそ十六にならせ給へばいまだ遙なるべき御盛にかかるをいと飽かずあはれと思されたり

【二一二】この御門はいとあてにおほどかなる御本性にて思しむすほれぬにはあらねどもけしきにも漏し給はず世にもいとどあへなき事に思ひ申しけり承明門院などはまいていと胸いたくおぼされけり

【二一三】その年の十二月に太上天皇の尊號あり新院と聞ゆれば父の御門をば今は本院と申すなほ御政事はかはらず今の御門は十四にぞなり給ふ御いみな守成と聞えしにや建曆二年十一月十三日大嘗會なり新院の御時もつかうまつられたりし資實の中納言にこの度も悠紀方の御屏風の歌めさる長等山

菅の根のながらの山のみねの松吹きくる風もよろづ代の聲
かやうの事は皆人のしろしめしたらむことあたらしく聞えなすこそ老の
ひがごとならめ

【二四】この御代にはいとけちえむなる事おほく所々の行幸しげく好ま
きさまなり建保二年春日の社に行幸ありしこそありがたき程いどみ盡し
おもしろうも侍りけれさてその又の年御百首の御歌よませ給ひけるに昨
年の事おぼしいでて内の御製

かすが山こぞのやよひの花の香にそめし心は神ぞしるらむ

【二五】御心ばへは新院よりも少しかどめいてあざやかにぞおはしましけ
る御才もやまともろこし兼ねていとやむごとなくものし給ふ朝夕の御い
となみは和歌の道にてぞ侍りける末の世に八雲などいふもの作らせ給へ
るもこの御門の御事なり

【二六】大方この院の上はよろづの事にいたり深く御心もはなやかに物に
くはしうなどぞ御座しましける夏の頃水無瀬殿の釣殿に出でさせ給ひて
氷水めして水飯やうのものなど若き上達部殿上人どもに賜はさせて大御
酒まゐるついでにもあはれ古への紫式部こそはいみじくはありけれかの

源氏物語にも近き川の鮎西川より奉れるいしぶしやうのもの御前に調じ
てと書けるなむ勝れてめでたきぞとよ只今さやうの料理つかまつりてむ
やなどのたまふを秦の某とかいふ御隨身高欄のもと近く候ひけるがうけ
たまはりて池の汀なる笹を少し敷きて白き米を洗ひて奉れり拾はば消え
なむとにやこれもけしかるわざかなとて御衣脱ぎてかづけさせ給ふ

【二七】また清撰の御歌合とてかぎりなく磨かせ給ひしも水無瀬殿にての
事なりしにや當座の衆議判なれば人々の心地いとどおき所なかりけむか
し建保二年九月のころすぐれたるかぎりぬき出で給ふめりしかばいづれ
かおろかならむ中にもいみじかりし事は第七番に左院の御歌

あかしがた浦路はれゆく朝なぎにきりにこぎ入るあまのつり舟
とありしに北面の中に藤原の秀能とて年比もこの道にゆりたるすきもの
なれば召し加へらるる事常のことなれどやむごとなき人々の歌だにもあ
るは一首二首三首には過ぎざりしにこの秀能九首までめされてしかも院
の御かたてにまゐれりさてありつるあまの釣舟の御歌の右に

契りおきし山の木の葉のした紅葉そめしころもに秋風ぞ吹く
と詠めりしはその身の上にとりてながき世の面目何かはあらむとぞ聞き
侍りし

【二八】昔の躬恒が御階のもとに召されて弓張ともしもいふ事はと奏して御
衣賜はりしをこそいみじきことにはいひ傳ふめれ又貫之が家に枇杷の大
臣魚袋の歌の返しとぶらひにおはしたりしをも道の高名とこそ世繼には
書いて侍れ近き頃は西行法師ぞ北面の者にて世にいみじき歌のひじりな
めりしが今の代の秀能はほとほとふるきにも立ちまさりてや侍らむこの
度の御歌合大方いづれとなくうちみだしてすぐれたる限りをえり出でさ
せ給ひしかば各むらむらにぞ侍りける吉水の僧正と聞えし又類なき歌の
聖にていましきそれだに四首ぞ入り給ひにけるさのみは事長ければもら
しぬ

第二 新島守

【二九】猛き武士のおこりを尋ねれば古へ田村利仁などいひけむ將軍ども
の事は耳遠ければさし置きぬそのかみより今まで源平の二流ぞ時により
折にしたがひておほやけの御守とはなりにける桓武天皇ときこえし御門
をば柏原の御門とも申しけりその御子に式部卿の御子と聞えしより五代
の末に平將軍貞盛といふ人維衡維時とて二人の子をもたりけり間近く榮
えし西八條の清盛の大臣はかの太郎維衡より六代の末なりきその一門亡
びしかばこの頃は僅にあるか無きかにぞさまよふめるさてかの維時が名
残はひたすらに民となりて平四郎時政と言ふもののみぞ伊豆の國北條の
郡とかやにあめるそれも維時には六代の末なるべし

【三〇】また源氏武者といふも清和の御門あるは宇多の院などの御後ども
なり二條の院の御時平治の亂に伊豆の國蛭が小島にながされし兵衛の佐

頼朝は清和の御門より八代のながれに六條の判官爲義といひし者の孫なり左馬頭義朝が三男になむありける西八條の入道おとどやうやう榮華おとろへむとて後白河院をなやまし奉りしかば安からず思されてかの頼朝を召し出でて軍を起し給ひしにしかるべき時やいたりけむ平家の人々は壽永の秋の木がらしに散りはてて遂にわたつみの底のもくづと沈みにし後頼朝いよいよ權をほどこして更に君の御後見を仕うまつる相模の國鎌倉の里といふ所に居りながら世をば掌の中に思ひき皆人知り給へることなれば今更に申すもなかなかなれど院のうへ位につかせ給ひしはじめより世のかためとなりて文治元年四月二の階をのぼりしも八島の内の大臣宗盛をいけどりの賞と聞ゆ

【三二】建久の初つかた都にのぼるその勢のいかめしき事いへばさらなり道すがらあそびものどもまゐる遠江の國橋本の宿につきたるに例の遊女おほくえもいはずさうぞきてまゐれり頼朝うちほほゑみてはしもとの君になにをか渡すべき

といへば梶原平三景時といふ武士とりあへず

ただそま山のくれであらばや

いとあいだてなしや馬鞍こむくりものなどはこび出でて引けば喜びさわぐ事かぎりなし

【三三】その年の十一月九日權大納言になされて右近大將をかねたり十二月の朔日ごろよろこび申して同じき四日やがてつかさをば返し奉るこの時ぞ諸國の總追捕使といふ事うけたまはりて地頭職にわが家の武士どもをなし集めけりこの日本國の衰ふるはじめはこれよりなるべし

【三三】北方はさきに聞えつる北條四郎時政が女なりその腹に男子二人あり太郎をば頼家といふ弟をば實朝と聞ゆ大將かくれて後兄はやがて立ちつぎて建仁元年六月二十二日從三位同日將軍の宣旨を賜はる又の年左衛門督になさるかかれども少しおちぬ心ばへなどありてやうやう武士ども背き背きにぞなりにける

【三四】時政は遠江守といひて故大將のありし時より私の後見なりしをまいて今は孫の世なればいよいよ身おもく勢そふ事かぎりなくうけばりたるさまなり子二人あり太郎は宗時次郎は義時といへり次郎は心も猛く魂まされるものにて左衛門督をばふさはしからず思ひて弟の實朝の君に付きしたがひて思ひ構ふる事などもありけり

【三五】督は日にそへて人にも背けられゆくにいとみじき病をさへして建仁三年九月十六日年二十二にて頭おろす世の中残おほく何事もあたらしかるべき程なればさこそ口惜しかりけめをさなき子の一萬といふにぞ世をば譲りけれどうけひくものなし入道はかの病つくるはむとて鎌倉より伊豆國へ温泉あびに越えたりける程にかしこの修善寺といふ所にて遂に討たれぬ一萬もやがて失はれけりこれは實朝と義時とひとつ心にてたばかりけるなるべし

【三六】さて今は偏に實朝故大將の跡を受け繼ぎて官位とどこほる事なく

よろづ心のままなり建保元年二月二十七日正二位せしは閑院の内裏つくれる賞とぞ聞き侍りし同じき六年權大納言になりて左大將を兼ねたり左馬のつかさをさへぞ附けられけるその年やがて内大臣になりてもなほ大將もとのままなり父にもやや立ちまさりていみじかりき

【三七】この大臣は大方心ばへうるはしく猛くもやさしくもよろづめやすければことわりにも過ぎて武士の靡き隨ふさまも父にも越えたりいかなる時にかありけむ

やまは裂け海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやもとぞよみける

【三八】時政は建保三年にかくれにしかば義時はあとを繼ぎけり故左衛門督の子にて公曉といふ大徳あり親の討たれにしことをいかでか安き心あらむいかならむ時にかとのみ思ひわたるにこの内大臣又右大臣に上りて大饗など珍しくあづまにて行ふ京より尊者をはじめ上達部殿上人多くと

ぶらひいましてけりさて鎌倉にうつし奉れる八幡の御社に神拜に詣づるといひかめしきひびきなれば國々の武士は更にもいはず都の人々も扈從しけり立ち騒ぎののしるもの見る人も多かる中にかの大徳うちまぎれて女のまねをして白き薄衣ひきをり大臣の車より下るる程をさしのぞくやうにぞ見えけるあやまたず首を打ち落しぬその程のとよみいみじさ思ひやりぬべしかくいふは承久元年正月廿七日なりそこらつどひ集れるものども只あきれたるより外の事なし京にも聞しめし驚く世の中火を消ちたるさまなり扈從に西園寺の宰相中將實氏も下り給ひきさならぬ人々も泣く泣く袖をしぼりてぞ上りける

【三九】いまだ子も無ければ立ちつぐべき人もなし事静まりなむ程とて故大臣の母北方二位殿政子といふ人二人の子をも亡ひて涙ほすまもなく萎れ過すをぞ將軍に用ひけるかくてもさのみはいかがにて公達一所くだし聞えて將軍になし奉らせ給へと公經の大臣に申し上せければあへなむと思すところに九條の左大臣殿の上はこの大臣の御女なりその御腹の若君

の二つになり給ふを下し聞えむと九條殿のたまへば御孫ならむもおなじ事と思して定め給ひぬ

【四〇】その年の六月にあづまにゐて奉る七月十九日におはしまし着きぬ襦袢の中の御ありさまはただ形代などを祝ひたらむやうにてよろづの事さながら右京權大夫義時朝臣心のままなりされど一の人の御子の將軍になり給へるはこれぞはじめなるべきかの平家の亡ぶべき世の末に人の夢に頼朝が後はその御太刀あづかるべしと春日大明神仰せられけるはこの今の若君の御事にこそありけめ

【四一】かくて世を靡かしたため行ふ事もほとほと古きには越えたりまめやかにめざましき事も多くなり行くに院の上忍びて思し立つ事などあるべし近く仕うまつる上達部殿上人まいて北面の下薦西面など言ふも皆この方にはほめきたるはあけくれ弓矢兵仗のいとなみより外の事なし劔などを御覽じ知ることさへいかで習はせ給ひたるにか道のものにもやや

立ち勝りてかしこくおはしませば御前にてよきあしきなど定めさせ給ふ

【四二】かやうのまぎれにて承久も三年になりぬ四月二十日御門おりさせ給ふ春宮四にならせ給ふに譲り申させたまふ近頃皆この御齡にて受禪ありつればこれもめでたき御行末ならむかし同じき廿三日院號の定ありて今おりさせ給へるを新院ときこゆれば御兄の院をば中の院と申し父御門をば本院とぞ聞えさするこのほどは家實の大臣關白にておはしつれど御讓位の時左大臣道家の大臣攝政になり給ふかのあづまの若君の御父なり

【四三】さても院の思し構ふる事忍ぶとすれどやうやう漏れ聞えて東さまにもその心づかひすべかめりあづまの代官にて伊賀の判官光季といふものありかつがつかれを御かうじのよし仰せらるれば御方に參る武士どもおし寄せたるに遁るべきやうなくて腹切りてけりまづいとめでたしとぞ院は思し召しける

【四四】東にもいみじうあわて騒ぐさるべくて身のうすべき時にこそあれと思ふものから討手の攻め來りなむ時にはかなきさまにて屍を曝さじおほやけと聞ゆとも自らし給ふことならねばかつは我が身の宿世をも見るばかりと思ひなりて弟の時房と泰時といふ一男と二人をかしらとして雲霞の武士をたなびかせて都にのぼす

【四五】泰時を前にすゑて言ふやうおのれをこの度都にまゐらす事は思ふ所多し本意の如く清き死をすべし人に後を見えなむには親の顔また見るべからず今を限りとおもへ賤しけれども義時君の御ために後めたき心やはあるされば横ざまの死をせむ事はあるべからず心を猛く思へおのれ打ち勝つものならばふたたびこの足柄箱根山は越ゆべしなど泣く泣く言ひ聞かすまことにしかなり又親の顔拜む事もいとあやふしと思ひて泰時も鎧の袖をしぼるかたみに今や限りとあはれに心細げなり

【四六】かくて打ち出でぬる又の日思ひかけぬ程に泰時ただ一人鞭を上げ

て馳せ來たり父胸うち騒ぎていかにと問ふに軍のあるべきやう大方のおきてなどをば仰の如くその心をえ侍りぬもし道のほとりにも計らざるに辱く鳳輦を先立てて御旗をあげられ臨幸の嚴重なる事も侍らむに参りあへらばその時の進退いか侍るべからむこの一事をたづね申さむとて一人馳せ侍りきといふ

【四七】義時とばかりうち案じてかしこくも問へる男かなその事なりまさに君の御輿に向ひて弓を引くことはいかがあらむさばかりの時は兜をぬぎ弓の弦を切りてひとへにかしこまりを申して身をまかせ奉るべしさはあらで君は都におはしましなから軍兵をたまはせば命を捨てて千人が一人になるまでも戦ふべしと言ひもはてぬに急ぎ立ちにけり

【四八】都にも思しまうけつる事なれば武士ども召しつどへ宇治勢田の橋もひかせて敵をふせぐべき用意心ことなり公經の大將一人のみなむ御孫のこともさる事にて北方一條中納言能保といふ人の女なりその母北方は

故大將のはらからなれば一方ならずあづまを重く思してさしいらへもせず院の御心の軽き事とあぶなかり給ふ

【四九】中院はあかで位をすべり給ひしより言に出でてこそものし給はねど世のいと心やましきままにかやうの御騒にもことにまじらせ給はざめり新院は同じ御心にてよろづ軍の事などもおきて仰せられけり

【五〇】いつの年よりも五月雨はれまなくて富士川天龍などえもいはず漲りさわぎていかなる龍馬もうち渡しがたければ攻め上る武者どももあやしくなやめりかかれども遂に都に近づくよし聞ゆれば君の御武者もいでたつその勢六萬餘騎とかや宇治勢多へ分ち遣す世の中ひびきののしる様言の葉も及ばずまねびがたしあるは深き山へ逃げこもり遠き世界に落ち下りすべて安げなくさわぎ満ちたりいかがあらむと君も御心亂れて思し惑ふ

【五一】かねては猛く見えし人々もまことのきはになりぬればいと心あわただしく色を失ひたるさまどもたのもしげなし六月十日あまりにやいくばくの戦だになくて遂にみかたの軍破れぬ荒磯に高潮などのさし来るやうにて泰時と時房とみだれ入りぬれば言はむ方なくあきれて上下ただ物にぞあたり惑ふ

【五二】東よりいひおこするままにかの二人の大將軍はからひおきてつづ保元のためしにや院の上都の外にうつし奉るべしと聞ゆれば女院宮々所所に思しまどふ事更なり本院は隱岐の國におはしますべければまづ鳥羽殿へ網代車のあやしげなるにて七月六日入らせ給ふ今日をかぎりの御ありきあさましうあはれなりものにもがなやと思さるるもかひなしその日やがて御ぐしおろす御年四十に一二や餘らせ給ふらむまだいとほしかるべき御程なり信實朝臣召して御姿うつし書かせらる七條の院へ奉らせ給はむとなりかくて同じき十三日に御船にたてまつりて遙なる浪路をしのぎおはします御心地この世のおなじ御身とも思されずいみじういかなり

ける代々の報にかとうらめし

【五三】新院も佐渡の國にうつらせ給ふまことや七月九日御門をもおろし奉りきこの四月かたとよ御讓位とてめでたかりしに夢のやうなり七十餘日にており給へるためしもこれやはじめならむ唐土にぞ四十五日とかや位におはする例ありけるとぞ唐の書讀みし人のいひし心地するそれもかやうの亂やありけむさて上達部殿上人それより下はた残るなくこの事に觸れにしたぐひは重く軽く罪に當るさまいみじげなり

【五四】中院は初より知しめさぬ事なればあづまにも咎め申さねど父の院遙にうつらせ給ひぬるにのどかにて都にてあらむ事いとおそれありと思されて御心もてその年閏十月十日土佐の國のはたといふ所に渡らせたまひぬ去年の二月ばかりにや若宮いできたまへり承明門院の御せうとに通宗の宰相中將とて若くてうせ給ひし人のむすめの御腹なりやがてかの宰相の弟に通方といふ人の家にとどめ奉り給ひて近くさぶらひける北面の

下臈一人召次などばかりぞ御供つかうまつりける

【五五】いとあやしき御手輿にて下らせ給ふ道すがら雪かきくらし風吹きあれ吹雪してこしかた行くさきも見えずいと堪へがたきに御袖もいたくこほりてわりなき事多かるに

うき世にはかかれとてこそ生れけめことわり知らぬわが涙かな
せめて近き程にとあづまより奏したりければ後には阿波の國にうつらせ給ひにき

【五六】さてもこの度世のありさまげにいとうたて口惜しきわざなりあるは父の王を失ふためしだに一萬八千人までありけりところ佛も説き給ひためれまして世下りて後唐土にも日の本にも國を争ひて戦をなす事數へ盡すべからずそれも皆一ふし二ふしのよせはありけむもしはすぢ異なる大臣さらでもおほやけともなるべききざみの少しのたがひめに世に隔たりてそのうらみの末などより事起るなりけり今のやうにむげの民と争ひ

て君のほろび給へる例この國にはいと數多も聞えざめり

【五七】四にて位に即き給ひて十五年おはしましきおり給ひて後も土佐院十二年佐渡院十一年なほ天の下は同じ事なりしかばすべて三十八年がほどこの國のあるじとして萬機の政事を御心ひとつに治め百の官をしたがへ給へりしそのほど吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御ありさまにて遠きをあはれび近きをなで給ふ御惠雨の足よりもしげければ津の國のこやのひまなき政事をきこし召すにも難波の葦の亂れざらむ事を思しき

【五八】藐姑射の山の峯の松もやうやう枝を連ねて千世に八千代を重ね霞の洞の御すまひいく春を経ても空ゆく月日の限りしらすのどけくおはしましぬべかりける世をありありてよしなき一ふしに今はかく花の都をさへ立ち別れおのがちりぢりにさすらへ磯の苦屋に軒をならべておのづからこととふものとは浦につりする蜃小船鹽焼く煙のなびく方をも我が故里のしるべにかとばかりながめ過ぐさせ給ふ御すまひどもはそれまで

と月日を限りたらむだに明日しらぬ世のうしろめたさにいと心細かるべ
しまいていつを果とかめぐり逢ふべき限りだになく雲の浪煙の波の幾重
とも知らぬ境に世をつくし給ふべき御さまども口惜しともおろかなり

【五九】このおはします所は人ばなれ里遠き島の中なり海づらよりは少し
ひき入りて山蔭にかたそへておほきやかなる巖の時てるをたよりにて松
の柱に葦ふける廊などけしきばかり事そぎたり誠に柴のいほりのただし
ばしとかりそめに見えたる御やどりなれどさる方になまめかしくゆゑづ
きてしなさせ給へり水無瀬殿思し出づるも夢のやうになむはるばると見
やらるる海の眺望二千里の外ものこりなき心地する今更めきたり鹽風の
いとこちたく吹き來るを聞しめして

われこそは新島守よおきのうみのあらきなみかせ心して吹け
同じ世にまたすみのえの月や見む今日こそよそにおきの島守

【六〇】年もかへりぬ所々浦々あはれなる事をのみ思しなげく佐渡院あけ

くれ御行をのみし給ひつつなほさりとともと思さる隠岐には浦よりをちの
はるばると霞みわたれる空を眺め入りて過ぎにし方かきつくしおもほし
出づるに行方なき御涙のみぞとどまらぬ

羨ましながらき日かげの春に逢ひて汐くむ海士も袖やほすらむ
夏になりてかやぶきの軒端に五月雨の雫いとところせきも御覧じなれぬ
御心地にさまかはりて珍しくおぼさる

あやめふくかやが軒端に風過ぎてしどろに落つるむら雨の露

【六一】初秋風のたちて世の中いとどものがなしく露けさまさるにいはむ
方なく思しみだる

ふる里を別路におふる葛の葉の秋はくれどもかへる世もなし
たとしへなくながめしをれさせ給へる夕暮に沖の方にいとちひさき木の
葉の浮べると見えて漕ぎ來るをあまの釣舟かと御覧するほどに都よりの
御消息なりけり

【六二】墨染の御衣夜の御ふすまなど都の夜寒に思ひやり聞えさせ給ひて七條院よりまゐれる御文ひきあけさせ給ふよりいといみじく御胸もせきあぐる心地すればややためらひて見給ふにあさましくもかくて月日經にける事今日あすとも知らぬ命のうち今一度いかで見奉りてしがなかながら死出の山路も越えやるべうも侍らでなむなどいと多く亂れ書き給へるを御顔におし當てて

垂乳根の消えやらで待つ露の身を風よりさきにいかでとはまし
八百萬神もあはれめたらちねのわれ待ちえむと絶えぬたまの緒

【六三】初雁の翼につけつつここかしこより哀なる御消息のみ常は奉るを御覽するにつけてもあさましういみじき御涙のもよほしなり家隆の二位は新古今の撰者にも召し加へられ大方歌の道につけてむつまじく召し使ひし人なれば夜晝戀ひ聞ゆること限りなしかの伊勢より須磨にまゐりけむもかくやとおぼゆるまで巻きかさねて書きつらねまゐらせたる和歌所の昔の面影かすかすに忘れがたうなど申してつらき命の今日まで侍るこ

との恨めしきよしなどえも言はずあはれおほくて

ねざめして聞かぬを聞きてわびしきは荒磯浪のあかつきの聲
とあるを法皇もいみじと思して御袖いたくしぼらせ給ふ

浪間なきおきのこじまの濱庇ひさしくなりぬみやこへだてて
木枯のおきのそまやま吹きしをりあらくしをれてもの思ふ頃

【六四】折々よませ給へる御歌どもを書きあつめて修明門院へ奉らせ給ふ
その中に

水無瀬山わがふる里はあれぬらむまがきはのらと人も通はで
かざしをる人もあらばや言とはむおきのみ山に杉は見ゆれど
限あればさてもたへける身のうさよ民の藁屋に軒をならべて
かやうの類すべて多く聞ゆれどさのみは年のつもりにえなむ今また思ひ
出でばついで求めてとて

第三ふぢ衣

【六五】その頃いとかずまへられ給はぬふる宮おはしけり守貞親王とぞ聞えける高倉院第三の御子なり隱岐の法皇の御このかみなれば思へばやむごとなけれど昔後白河の法皇安徳院の筑紫へおはしまして後に見奉らせ給ひける御孫の宮たちえりの時泣き給ひしによりて位にも即かせ給はざりしかば世の中もの恨めしきやうにて過し給ふさびしく人目まれなれば年を経てあれまさりつつ草ふかく八重葎のみさしかためたる宮の中にいと心細くながめおはするに建保の頃宮のうちの女房の夢に冠したるもの數多まわりて劔璽を入れ奉るべきにおのおの用意して候はれよといふと見てければいとあやしうおぼえて宮に語り聞えけれどいかでかさほどの事あらむと思しも寄らで遂に御髪をさへおろし給ひてこの世の御望は絶ちはてぬる心地してもものし給へるにこのみだれ出で来て一院の御ぞうは皆さまざまにさすらへ給ひぬればおのづから小さななど残り給へるも世に

さし放たれてさりぬべき君もおはしまさぬにより東よりのおきてにてかの入道親王の御子の十になり給ふを承久三年七月九日俄に御位に即けたてまつる父の宮をば太上天皇になし奉りて法皇ときこゆいとめでたく横ざまの御さいはひおはしける宮なり

【六六】孫王にて位に即かせたまへるためし光仁天皇より後は絶えて久しかりつるに珍しくめでたしその十二月一日に御即位明くる年貞應元年正月三日御元服したまふ御いみな茂仁とまうす御かたちもなまめかしくあてにぞおはします御母基家中納言のむすめ北白河院と申しき家實の大臣又攝政になりかへらせ給ひてよろづおきてのたまふもさまざまに引きかへしたる世なりかし又の年五月の頃法皇かくれさせ給ひぬれば天下みなくろみわたりぬ上も御服たてまつるきびはなる御程にいとみじうあはれなる御事なめり

【六七】まことやその年十一月十一日阿波の院かくれさせたまひぬいとあ

はれにはかなき御事かな例ならず思されければ御髪おろさせ給ひにけり
 こころものをのみ思して今年は三十七にぞならせ給ひけるいま一度都を
 も御覽せすなりぬるいみじうかなしきを隠岐の小島にもきこしめしなげ
 く

【六八】今年もはかなく暮れて貞永元年になりぬ定家中納言承りて撰集の
 沙汰ありつるをこの程御門おりさせ給ふべきよし聞ゆればにやいと疾く
 十月二日奏せられけり一年のうちに奏せられたるいとありがたくこそ新
 勅撰と聞ゆ元久に新古今いできて後程なく世の中もひきかへぬるに又新
 の字うち續きたる心よからぬ事などささめく人も侍りけるとかや

【六九】さて同じき四日おり居させ給ふ御惱重きによりてなりけり去年の
 二月後の宮の御腹に一の御子出でき給へりしかばやがて太子に立たせ給
 ひしぞかし例の人の口さがなさはかの承久の廢帝の生れさせ給ふとひと
 しく坊に居給へりしはいと不用なりしをなどいふめり上はおりさせ給ひ

てその七日やがて尊號あり御惱なほおこたらず大方世も静ならずこの三
 年ばかりは天變しきりなるふりなどしてさとししげく御慎おもきやうな
 ればいかがおはしまさむと御心ども騒ぐべし今上は二歳にぞならせたま
 ふあさましき程の御いわけなさにていつくしき十善のあるじにさだまり
 給ふ事いとゆゆしきまで前の世ゆかしき御有様なり

【七〇】中宮も御物怪に惱ませ給ひて常はあつしうおはしますを院はいと
 どはれまなく思し歎く四月の頃年號改まる天福といふなるべしその同じ
 頃中宮も位去り給ひて藻壁門院とぞ聞ゆなる今年も又例ならずなやませ
 給へばめでたき御事の數添はせ給ふべきにこそと世の中めでたくきこゆ
 祭祓なにくれとおびただしくまだきよりののしるましてその程近くなり
 ては天の下やすきそらなく山々寺々社々御祈ひびきさわげども御物怪こ
 はくていみじうあさまし遂に九月十八日にかくれさせ給ひぬその程のい
 みじさ推し量りぬべし今年二十五にならせ給ふ若く清らに美しげにてさ
 かりなる花の御姿時の間の露と消えはて給ひぬるいはむ方なし殿うへ思

しまどふさまかなしともいへばさらなり

【七一】院に候ふ民部卿典侍ときこゆるは定家中納言の女なりこの宮の御方にもけぢかう仕うまつる人なりけりかぎりなく思ひしづみて頭おろしぬいみじう哀なる事なり人の問へる返事に

悲しさはうき世のとがと背けどもただ戀しさのなぐさめぞなき

當代の御母后にておはしつれば天下みな一つ墨染にやつれぬ

【七二】この御歎にいよいよ院は沈みまさらせ給ひてうち絶えて御ゆなどをだに御覽じいるる事なくて月日つもらせたまへば御修法どもいとちたく山々寺々残りなくつとめののしる醫師陰陽師祭祓など天の下さわざみちたり又年號かはりぬ文暦元年といふ承久の廢帝十七になり給へるも五月二十日にうせ給ひぬいと若き御ほどにいとほしうあたらしき御年なりかし隠岐にも打續き哀なる事どもを聞き召し歎くべし佐渡にはまして心うくあさましと思さるこの御さしつぎの宮猶おはしますは修明門

院養ひ奉らせ給ふめり

【七三】かく言ひしろふほどに院の御惱日々に重くならせ給ひて八月六日いとあさましうならせ給ひぬ世のおもしにておはしますべきことのかくあへなき御ありさま口惜しなど聞ゆるもなのめなり大方御本性もなごやかにらうらしく御かたちもまほに美しうととのほりて二十に三つばかりや餘らせ給ふらむ若うさかりの御程に御才なども和漢たどしからず何事につけてもいとあたらしうおはしませば世人の惜み聞ゆるさまかぎりなし只くれまどへる心地どもなり後堀河院とぞ申しける故宮の御はてだに過ぎず又とりかさねて諒闇の三年までにならむことをいとまがまがしくゆゆしと皆人思ふべし御契の程のあはれさもいとありがたくなむ御袂大嘗會などもいとど延びぬ只ここもかしこも高きも下れるも都も遠き島々も涙にうきしづみてぞ過し給ひける

【七四】さまざまめでたくもあはれにもいろいろなる都のことどもをほの

かに傳へ聞し召して隱岐にはあさましの年のつもりやと御齡にそへても盡きせぬ御なげきぐさのみ茂りそふ慰めにはおぼし馴れにし事とて敷島の道にのみぞ御心をのべける

【七五】この浦にすませ給ひて十九年ばかりにやありけむ延應元年といふ二月二十二日六十にてかくれさせ給ひぬ今一度都へ歸らむの御志深かりしかど遂に空しくてやみ給ひにし事いとかたじけなく哀になさけなき世も今更心うし近き山にて例のさほうになし奉るもむげに人すくなに心ぼそき御ありさまいとあはれになむ

第四 三神山

【七六】さても源大納言通方のあづかり奉られし阿波院の宮はおとなび給ふままに御心ばへもいときやうさくに御かたちもいとうるはしくけだかくやむごとなき御有様なればなべて世の人もいとあたらしき事に思ひ聞

えけり大納言さへ暦仁の頃うせにしかばいよいよ真心に仕うまつる人もなく心細げにて何を待つとしもなくかかづらひておはしますも人わろくあぢきなう思さるべし御母は土御門の内大臣通親の御子に宰相の中將通宗とて若くて亡せにし人の御女なりそれさへかくれ給ひにしかば宰相のはらからの姫君ぞ御乳母のやうにて瞿曇彌の釋迦佛養ひ奉りけむ心地しておはしける

【七七】二にて父御門には別れ奉り給ひしかば御面影だにおぼえ給はねど猶この世の中におはすと思されしまではおのづからあひ見奉るやうもやなど人しれず幼き御心にかかりて思しわたりけるに十二の御年かとよかくれさせ給ひぬと傳へ聞き給ひし後はいよいよ世のうさを思しくむじつといとまめだちてのみおはしますを承明門院は心苦しうかなしと見奉りたまふ

【七八】土御門殿の宮は二十にもあまり給ひぬれど御冠の沙汰もなし城興

寺の宮僧正眞性と聞ゆる御弟子にと語らひ申し給ひければさやうにもと思して女院にもほのめかし申させ給ひけるをいとあるまじき事とのみ諫め聞えさせ給ふ

【七九】その冬の頃宮いたう忍びて石清水の社に詣でさせたまひ御念誦のどかにし給ひて少しまどろませ給へるに神殿の内に椿葉のかげ二たびあらたまるといとあざやかにけだかき聲にてうち誦じ給ふと聞きて御覽じあげたれば明方の空すみわたれるに星の光もけざやかにていと神さびたりいかに見えつる御夢ならむとあやしく思さるれど人にもものたまはずとまれかくもあれといよいよ御學問をぞせさせ給ふ

【八〇】年もかへりぬ春の始はおしなべて程々につけたる家々の身のいはひなど心ゆきはこらしげなるに正月の五日より内の上例ならぬ御事にて七日の節會にも御帳にもつかせ給はねばいとさうざうしく人々思しあへるに九日の曉かくれさせ給ひぬとてののしりあへるいとあさましとも言

ふばかりなし皆人あきれまどひてなかなか涙だに出でこず

【八一】かくのみあさましき御事どものうち續きぬるはいかにもかの遠き浦々にて沈みはてさせ給ひにし御歎どものつもりにやとぞ世の人もささめきける御惱のはじめもなべてのすぢにはあらずあまりいわけたる御遊よりそこなはれ給ひにけるとぞいまだ御つぎもおはしまさず又御はらかなの宮なども渡らせ給はねば世の中いかになり行かむするにかとたどりあへるさまなり

【八二】さてしもやはにて東へぞ告げやりける將軍は大殿の御子今は大納言殿と聞ゆ御後見は承久に上りたりし泰時朝臣なり時房朝臣と一所にて小弓射させ酒もりなどして心とけたる程なりけるに京よりのはしり馬といへば何事ならむと驚きながら使召し寄せて聞くにいとあさましきりとしてあるべきならねばその席よりやがて神事はじめて若宮の社にて鬮をぞとりける

【八三】その程都にはいとうかびたる事ども心のひきひきいひしろふ佐渡院の宮たちになど聞えければ修明門院にも御心ときめきして内々その御用意などし給ふ承明門院ももしやなどさまさま御いのりし給ふ東の使都に入るよし聞ゆる日は兩女院より白河に人を立てていつかたへか参ると見せられけるぞことわりにげに今見ゆべき事なれども物の心もとなきはさ覺ゆるわざぞかすと例の口すげみてほほゑむ

【八四】日ぐらし待たれて城介義景といふもの三條河原にうち出でて承明門院のおはしますなる院はいづくぞとかの院より立てられたる青侍のいとあやしげなるにしも問ひければ聞く心地うつつともおぼえずしかじかと申すままに土御門殿へ参りたれど門は葎つよくかため扉もさびつき柱根朽ちてあかざりけるを郎等どもにとかくせさせて内に参りて見まはせば庭には草ふかく青き苔のみむして松風より外は答ふるものもなく人の通へる跡もなし故通宗宰相中將の御弟を子にし給へりし定通の大臣ばかりぞ何となくおのづからの事もやと思ひてなえばめる烏帽子直衣にて候

ひ給ひけるが中門に出でて對面し給ふ義景は切戸のわきにかしこまりてぞ侍りける阿波の院の御子御位にと申して出でぬ院の中の人々上下夢の心地して物にぞあたりまどひける仁治三年正月十九日の事なり

【八五】世の人の心地みな驚きあわてておしかへし此方に参りつどふ馬車の響き騒ぐ世のおとなひを四辻殿にはあさましようなかなか物思しまさるべし又の日やがて御元服せさせ給ふひきいれに左大臣参りたまふ理髪頭辨定嗣仕うまつりけり御諱邦仁御年二十三その夜やがて冷泉萬里小路殿へ移らせ給ひて閑院殿より劔璽など渡さる踐祚の儀式いとめづらし

第五 内野の雪

【八六】今後の御父は先にも聞えつる右大臣實氏の大匠その父故公經の太政大臣そのかみ夢見たまへることありて源氏の中將わらはやみまじなひ給ひし北山のほとりに世に知らずゆゆしき御堂を建てて名をば西園寺と

いふめりこの所は伯三位資仲の領なりしを尾張の國松枝といふ庄にかへ給ひてけりもとは田畑などおほくてひたぶるに田舎めきたりしを更にうちかへし崩して艶なる園につくりなし山のたたずまひ木深く池の心ゆたかにわたつみたたへ峰よりおつる瀧のひびきもげに涙催しぬべく心ばせ深き所のさまなり

【八七】北の寢殿にぞ大臣は住み給ふ廻れる山の常盤木どもいとふりたるになつかしき程の若木の櫻など植ゑ渡すとて大臣うそぶき給ひけり

山櫻みねにもをにもうゑ置かむ見ぬ世のはるを人やしのぶと

かの法成寺をのみこそいみじきためしに世繼もいひためれどこれは猶山の景色さへおもしろく都はなれて眺望そひたれば言はむ方なくめでたし峯殿の御舅東の將軍の御祖父にてよろづ世の中御心のままに飽かぬ事なくゆゆしくなむおはしける今の右の大臣をさをさ劣り給はず世のおもしにていとやむごとなくおはするに女御さへ御おぼえめでたくいつしかただならずおはすると聞ゆる奥ゆかしき御程なるべし

【八八】京にはさまざまめでたき事のみ多かるにかの佐渡の島には御惱と聞えし程なく九月十二日かくれさせ給ひぬ世の中の改りしきざみもしやなど思しよる事どもありしも空しう隔りのみはてぬる世をいと心細う聞き召しけるにそこはかとなく御惱など重るやうにてうせ御ひにけるとぞ聞えし四十六にぞならせ給ひけるいと哀なる世の中なるべし

【八九】又の年寛元二年あづまの大納言頼經の君一とせ二歳にて下りたまひし峰殿の御子ぞかし惱み給ふよし聞えしが御子の六になり給ふに譲りて都へ御かへりと聞ゆ若君はその日やがて將軍の宣旨下され少將になりたまふ頼嗣となのりたまふ泰時朝臣も一昨年入道して孫の時頼の朝臣に世をば譲りにしかばこの頃は天の下の御後見はこの相模守時頼の朝臣つかうまつるいみじう賢きものなればめでたき聞えのみありてつはものも靡きしたがひ大方世もしづかに治りすましたり

【九〇】後嵯峨の院の上はいつしか所々に御幸しげう御遊などめでたく今

めかしきさまにこのませたまふ西園寺にはじめて御幸なりしさまこそいとめづらかなる見物にて侍りしか太政大臣御あるじ申されしさまいかめしかりきいはずとも思ひやるべし御贈物に代々の御手本奉らるとて大臣つたへきく聖の代々の跡を見てふるきをうつす道ならはなむ御返し御製

知らざりし昔に今やかへりなむかしこき代々のあと習ひなば

【九一】中宮も位去り給ひて大宮女院とぞきこゆる安らかに常は一つ御車などにてただ人のやうに花やかなる事どものみ隙なくよろづあらまほしき御有様なり院のうへ石清水の社に詣でさせ給ひて日比おはしませば世の人残なく仕うまつれりさるべき事とはいひながらなほいみじう御心にも一年の事思し出でられてことに畏まり聞えさせ給ふべし御歌あまたあそばして寶殿にこめさせ結ひし中に

石清水木がくれたりしいにしへをおもひ出づればすむ心かな

【九二】寶治の頃神無月二十日餘なりしにや紅葉御覽じに宇治に御幸し給ふ上達部殿上人思ひ思ひいろいろの狩衣菊紅葉の濃きうすき縫物織物綾錦すべて世になき清らを盡しさわぐいみじき見物なり殿上人の船に樂器を設けたり橘の小島に御船さしとめて物の音ども吹きたてたるほど水の底も耳たてぬべくそぞろ寒きほどなるに折知りがほに空さへうちしぐれてまきの山風あらましきに木の葉どものいろいろ散りまがふけしきいひ知らず面白し女房の船にいろいろの袖口わざとなくこぼれ出でたる夕日に輝きあひて錦を洗ふ九の江かと見えたり平等院に中一日わたらせ給ひてさまざまのおもしろき事ども數知らず網代に氷魚のよるもさながらののしり明かしてかへらせ給ふ

第六 烟の末々

【九三】寶治二年十一月二十日ごろもみぢ御覽じがてら宇治に御幸し給ふ上達部殿上人思ひ思ひいろいろの狩衣菊紅葉の濃き薄き縫物織物あや錦

かねてより世のいとなみなり二十一日の朝ぼらけに出でさせ給ふ

【九四】又の日の暮つかたまた御船にて横の島梅の島橋の小島など御覽せらる御遊はじまる船のうちに樂器ども設けられたれば吹き立てたるもの音世に知らず所がらはましておもしろう聞ゆるに水の底にも耳とむるものやとそぞろさむきほどなりかの優婆塞の宮のへだてて見ゆるとのたまひけむ遠の白浪もえむなる音をそへたるはよろづをりからにや

【九五】この御留守のほどに二條油小路に火出できて閑院殿のついがきの中なれば内膳屋焼けて神代より傳はれる御釜も焼けそこなはれけるをぞいとあさましき事には申し侍りしかの釜昔は三つありけるを一つをば平野一つをば忌火一つをば庭火と申しけるを圓融院の御代永觀の頃二つは失せにけり今一つ残りたるにかかる事の出で來ぬるはいとよろしからぬわざなりとて神祇官に尋ねられ古き事ども考へらる平野といひけるを陰陽寮にすゑてみづのとの祭といふ事に用ひけれど中頃よりかの祭は絶え

ぬ忌火といふにては六月十二月の御神事の御膳をば調じけり庭火にて常の御膳をば仕うまつるかかればいとたいだいしき事にて初はいもじに仰せらるべきかとも申す古きを損はれたる所ばかりをなほさるべきかとも色々に定めかねられたり入道太政大臣なども古きを直さるべしと申さるとぞ聞えける

【九六】かくいふ程に二月一日の夜常よりも九重の宮の内人少にて大方夜も靜なるに子の時ばかりに閑院殿の二條おもての對より火出で來て棟もえ落つる程にぞ始めて見つけたる淺ましとも斜なる何のたどりもなく只あわて騒ぎ我も人もうつし心なければ公直の中將の御とのゐに候ひけるが車の陣なるを召して皇后宮の御方へ寄す内の上をば御匣殿抱き奉らせ給ひて宮もたてまつる劍璽ばかり取り具して門を急ぎ出でさせたまふ

【九七】内の焼くることはこれを初にもあらず世上りての事はさしおきぬ天徳四年村上のさばかりめでたかりし神代よりこの方既に二十餘度にな

りぬるにや聖の御代にしもかかる事は侍りしかど承元に焼けにし後は久しくこの四十四年は無かりつるに去年の冬御釜焼け損じて又かくうち續きぬるをいとあさましう思す何よりも御門の御車に奉りて出でさせ給へるをいたく例なき事とかやとて人々かたぶき申す院もおどろきおぼされて古き事ども廣く尋ねられなどすべし

【九八】鳥羽院も近頃はいたう荒れて池も水草がちに埋れたりつるをいみじう修理し磨かせ給ひてはじめて御幸なりし時池邊松といふ事講せられしに太政大臣序を書き給へりき夫鳥羽仙洞三五累聖離宮一百餘載とかやまた御身のいみじき事には蓬の髪霜寒くて七代に傳へたりと侍りしこそめでたけれ

いはひおく始めと今日を松が枝の千年のかげにすめる池みづ院の御製

影うつす松にも千世のいろ見えて今日すみそむるやどの池水
大納言典侍の聞えしは爲家の民部卿の女なりしにや

いろかへぬときはの松の影そへて千代に八千代にすめる池水
すむながるめりしかど例のうるさければなむ御前の御遊はじまる程反橋のもとに龍頭鶴首寄せていと面白く吹き合せたりかやうの事常の御遊いとしげかりき

【九九】また太政大臣の津の國吹田の山庄にもいとしばしばおはしませたまざまの御遊數をつくしいかにせむともてはやし申さる川に臨める家なれば秋深き月のさかりなどは殊に艶ありて門田の稻の風に靡くけしき妻訪ふ鹿の聲衣うつ砧の音峰の秋風野邊の松蟲とり集めあはれ添ひたる所のさまに鶉飼などおろさせて篝火どももしたる川の面いと珍しうをかしと御覽す日比おはしまして人々に十首の歌召されしついでに院の御製

川船のさしていづくかわがならぬ旅とはいはじやどと定めむ
と講じ上げたるほど主の大臣いみじう興じ給ふこの家の面目今日に侍るとぞ宣はするげにさる事と聞く人皆ほこらしくなむ

【二〇〇】さても院の第一の御子は源氏にやなし奉らましなど思すに猶飽かねばただ御子にて東の主になし聞えてむと思して建長四年正月八日院の御前にて御冠し給ふ御門の御元服にもほとほと劣らず内藏寮何くれ清らを盡し給ふやがて三品の位たまはり給ふ御年十一なるべし中務卿宗尊親王と申すめり

【二〇一】おなじ二月十九日に都を出で給ふその日將軍の宣旨蒙り給ふかかる例はいまだ侍らぬにや上下珍しくおもしろき事にいひ騒ぐべし御迎に東の武士ども數多上り六波羅よりも名あるもの十人御送に下る上達部殿上人女房などあまたまるも院中の奉公にひとしかるべしかしこに候ふとも限あらむつかさかうぶりなどはさはり有るまじとぞ仰せられける何事も只人がらによると見えたりきはことによそほしげなり誠におほやけとなり給はずばこれよりまさること何事かあらむにぎははしく花やかさはならぶ方なし院の方も忍びて粟田口のほとりに御車立てて御覽じ送りけるこそあはれにかたじけなく侍れきびはに美しげにて遙々とおはし

ますを御母の内侍はあはれにかたじけなしと思ひ聞ゆべし

【二〇二】かかればもとの將軍頼嗣三位中將はその四月に都へ上り給ひぬいとほしげにぞ見え給ひけるさて今下り給へるをもて崇め奉るさまいはむ方なし宮の中のしつらひ御まうけの事など限あれば善見天の殊妙の莊嚴もかくやとぞ覺えけるかやうにて今年は暮れぬ

【二〇三】明くる年は建長五年なり正月十三日御門御かうぶりし給ふ御年十一御いみな久仁と申すいとあてにおはしませどあまりささやかにて又御腰などのあやしく渡らせ給ふぞ口惜かりけるいわけなかりし御程はなほいとあさましようおはしましけるを閑院の内裏焼けるまぎれよりうるはしく立たせ給ひたりければ内の焼けたるあさましさは何ならずこの御腰のなほりたる喜びをのみぞ上下思しける

【二〇四】その頃ほひ熊野の御幸侍りしにもよき上達部あまた仕うまつら

せ給ふ都出でさせ給ふ日例の棧敷など心ことにいどみかはすべし車は立てぬ事なりしかど大宮院ばかりそれも出車はなくて只一輛にて見奉り給ひしこそやむごとなさも面白く侍りけれ辨の内侍

をりかざすなぎの葉風のかしこさにひとりみちある小車の跡

【一〇五】 御幸熊野の本宮につかせ給ひてそれより新宮の川船に奉りてさし渡すほど川のおもて所せきまで續きたるも御覽じなれぬさまなれば院のうへ

熊野川せぎりにわたす杉船のへなみにそでの濡れにけるかな
その後も又程なく御幸ありしかば女院も参り給ひけり皆人しろしめしたらむ事なかなかこそ

第七 おりゐる雲

【一〇六】 正嘉元年の春の頃より承明門院御惱おもらせ給へば院もいみじ

う驚かせ給ひて御修法なにかと聞えつれど遂に七月五日御年八十七にてかくれさせ給ひぬことわりの御年の程なれど昔の御名残と哀にいとほしういたづき奉らせ給ひつるにあへなくて御法事などねむごろにおきてのたまはするいとめでたき御身なりかし明くる年八月七日二の御子坊に居たまひぬ御年十なりよろづ定まりぬる世の中めでたく心のどかに思さるべし

【一〇七】 かくのみ所々に御幸しげう御心ゆく事ひまなくていささかも思し結ぼるる事もなくめでたき御有様なれば仕うまつる人々までも思ふ事なき世なり吉田の院にても常は御歌合などし給ふ鳥羽殿にはいと久しくおはします折のみあり春の頃御幸ありしには御門も御鞞に立たせ給へり二條關白あげ鞠したまひき内の女房など召して池の御船に乗せて物の音ども吹き合せ様々の風流のわりご引出物などちたき事どももしげかりき

【二〇八】又嵯峨の龜山の麓大井河の北の岸にあたりてゆゆしき院をぞ造らせ給へる小倉の山のこずゑ戸無瀬の瀧もさながら御垣の中に見えてわざとつくろはぬ前栽もおのづからなさを加へたる所がらいみじき繪師といふとも筆及びがたし

【二〇九】正元元年三月五日西園寺の花ざかりに大宮院一切經供養せさせ給ふ年比思しおきてけるをもいたく知しめさぬに女の御願にていとかしこくありがたき御事なれば院も同じ御心にゐたちのたまふ樂屋のものども地下も殿上もなべてならぬをえりととのへらるその日になりて行幸あり春宮も同じく行啓なる大臣上達部皆うへのきぬにて左右に分れて御階の間の高欄につき給ふ法會の儀式いみじくめでたき事どもまねびがたし

【二一〇】又の日御前の御あそび始まる御門御琵琶春宮御笛まだいとちひさき御程にびむづら結ひて御かたちまほに美しげにて吹きたて給へる音の雲ゐをひびかしてあまり恐しき程なれば天つ少女もかくやと覺えて太

政大臣こといみもえし給はず目おし拭ひつつためらひかね給へるをことわりに老いしらへる大臣上達部など皆御袖どもうるほひ渡りぬ女院の御心の中ましておき所なく思さるらむかし前の世にかばかり功德の御身にてかく思すさまにめでたき御榮を見給ふらむと思ひやり聞ゆるもゆゆしきまでぞ侍りし

【二一一】御遊はてて後文臺めさる院の御製

いろいろに枝を連ねて咲きにけり花もわが世も今さかりかも
あたりを拂ひてきはなくめでたく聞えけるに主のおとど歌さへぞかけあひて侍りしや

いろいろに榮えてにはへ櫻花わがきみぎみの千世のかざしに
末まで多かりしかど例のさのみはにて止めつかめしうひびきて歸らせ給ひぬるまたのあした無量光院の花のもとにておとど昨日の名殘思し出づるもいみじうて

この春ぞこころの色はひらけぬる六十あまりの花は見しかど

第八 山のもみぢ葉

【一一二】 正元元年十一月二十六日讓位の儀式常の如し十二月二十八日御即位よろづめでたくあるべきかぎりにて年もかへりぬおりぬの御門は十二月の二日太上天皇の尊號ありて新院と聞ゆ本院と常はひとつに渡らせ給ひて御遊しげう心やりてなかなかいとのだやかにめやすき御有様に思しなぐさむやうなり

【一一三】 かくて弘長三年二月の頃大方の世のけしきもうららかに霞み渡るに春風ぬるく吹きて龜山殿の御前の櫻ほころびそむるけしき常よりもことなれば行幸あるべく思しおきつ關白この三年ばかり又かへりなり給へば御隨身ども花を折りて行幸よりも先に参りまうけ給ふその外の上達部も例のきらきらしきかぎり残るは少し新院も兩女院も渡らせたまふ

【一一四】 御前の汀に船ども浮べてをかしきさまなる童四位の若きほど乗せて花の木蔭より漕ぎ出でたるほどになく面白し舞樂さまさま曲など手をつくされけり御遊の後人々歌奉る花契_ニ退年_一といふ題なりしにや内の上の御製

たづね来てあかぬ心にまかせなば千とせや花の蔭にすごさむ
かやうの方までもいとめでたくおはしますとぞ古き人々申すめりしかへ
らせ給ふ日御贈物どもいとさままなる中に延喜の御手本を鶯のゐたる
梅の造枝につけて奉らせ給ふとて院のうへ

梅が枝に代々のむかしの春かけて變らず來居るうぐひすの聲
御返を忘れたるこそ老のつもりうたて口惜しけれ

【一一五】 その年九月十三夜龜山殿の棧敷殿にて御歌合せさせ給ふかやうの事は白河殿にても鳥羽殿にてもいとしげかりしかどいかでかさのみはにて皆漏しぬこの度は心ことにみがかせ給ふ右は關白殿にて歌どもえりととのへらる左は院の御前にて御覽せられけるこのほど殿と申すは圓明

寺殿の御事なり新院の御位の初つ方攝政にていませしが又この一とせば
かり歸りならせ給へり前の關白殿は院の御方にさぶらはせ給ふ

【一一六】その外すぐれたるかぎり右は關白殿今出川のおほきおとど皇后
宮の御父の左大臣殿より下皆この道の上手どもなり左は大殿よりかずだ
てつくりて風流の洲濱沈にて造れる上に銀の船二つにいろいろの色紙を
書き重ねて積まれたり數も沈にて造りて船に入れらる左右の讀師一度に
御前に參りて讀み上ぐ左具氏中將右行家なり山紅葉本院の御製

外よりは時雨もいかが染めざらむ我が植ゑて見る山のみぢ葉
終に左御勝の數まさりぬ

【一一七】披講はてて夜更け行くほどに御遊はじまる笛は花山院中納言茂
通の中將笙は公顯の中將にておはせしにや筆策は忠輔の中將琵琶は太政
大臣具氏の中將も彈き給ひけるとぞ御簾の内にも御箏どもかき合せらる
東の御方と聞えしは新院の若宮の御母君にや刑部卿の君もひかれけり樂

のひまひまに太政大臣土御門大納言通成など朗詠したまふ忠輔公顯聲加
へたるほど面白し

【一一八】川浪も更け行くままに凄う月は氷をしける心地するに嵐の山の
紅葉夜の錦とは誰か言ひけむ吹きおろす松風にたぐひて御前の簀子にて
御酒まゐるかほはらけの中などに散りかかるわざと艶なる事をつまにもし
つべし若き人々は身にしむばかり思へりうち亂れたるさまに各御かはら
けども數多たび下る明けゆく空も名殘おほかるべし

第九 北野の雪

【一一九】文永も三年になりぬ卯月に蓮華王院の供養に御幸あり御願文の
清書は經朝の三位料紙は紫の色紙額はかの建て始められし長寛に教長か
きたりけるが焼けざりければこの度もそれをぞ用ひられける

【二二〇】かくて少し人々の心のどかにうち静まりて思さるるに東に何事にか煩しきこと出で來にたりとて將軍七月八日俄なるやうにて御のぼりありけりかねては始めて御のぼりあらむ時の儀式などになくめでたかるべきよしをのみ聞きしに思ひかけぬ程にいとあやしき御ありさまにて御のぼりあり御くだりの折六波羅の北方に建てられたりし檜皮屋におちつかせおはしましぬこの頃東に世の中おきてはからふ主は相模守時宗と左京權大夫政村朝臣なり時宗といふは時頼朝臣の嫡子政村とはありし義時の四郎なり京の兩六波羅は陸奥守時茂式部大輔時輔とぞ聞ゆる

【二二一】中務の御子の御のぼりの代にかの御子の三になり給ふ若君達近衛殿の姫君の御腹ぞかし七月二十七日に將軍の宣旨かうぶらせ給ひてやがて四品し給ふ經任の中納言を御使にて東へ下されなどして苦しからぬ御事になりぬとて十月ばかりに故承明門院の御跡土御門萬里小路殿へ御うつろひありて後ぞ院の上御母准后なども参りはじめて御對面ありさるべき人々も参り仕うまつりなどして世のつねの御有様にはなりにけれど

建長四年御年十一にて御下ありし後今迄十五年が程にぎははしくいみじうもてあがめられさせ給ひてゆゆしかりつる御住ひにひきかへてももの淋しく心細うなど思さるる折々もありけるにや

虎とのみもてなされしは昔にていまはねすみのあなう世の中

又雪のいみじう降りたる朝右近の馬場の方御覽じにおはしましてよませ給ひける

なほたのむ北野の雪の朝ぼらけあとなきことに埋もるる身は
など聞えき

【二二三】大方この御子の歌のひじりにておはします事皆人の口に侍るべし枯野の眞葛霜とけてなども人毎にめでののしる御歌なるべしされば世を亂らむなど思ひよりける武士のこの御子の御歌すぐれて詠ませ給ふを夜晝いとむつまじく仕うまつりける程におのづから同じ心なるものなど多くなりて宮の御氣色あるやに言ひなしけるとかや

【一二三】 今年五月雨常よりも晴間なくて伊勢の宮河も岸をひたして齋宮の御参も御船なり祭主も別の船にて御供仕うまつる道すがら歌うたひ絲竹のしらべなどして面白くあそび暮す御下の後四とせになりぬ古き例にまかせて准後の宣旨まゐる御使に中院の少將爲定朝臣下りて事のよし申す殿上に召して裳唐衣祿たまふ舞踏して後都の物語などさるべき大人だつ人々に少し聞えかはす

【一二四】 その同じ頃安嘉門院丹後の天の橋立御覽じにとておはしますそれより但馬の城崎にいでゆめしに下らせたまふ爲家の大納言光成の三位など御供つかうまつらるこの女院の御ありさまぞ又いといみじう來しかた行く末の例にもなりぬべく萬の事御心のままに好ましくものし給ひける童舞白拍子田樂などいふ事このませ給ひて古の郁芳門院にもやや勝りてぞおはします侍ふ人々も常に打ちとけず衣の色あざやかにばなたと今めかしき院の内なり又安養壽院といひて山の峰なる御堂には常に立てこもらせ給ひて御觀法などあるには人の参る事もたやすくなし鳴子をか

けて引かせ給ひてぞおのづから人をも召しける

【一二五】 又その頃大風吹きて人々の家々そこなはれ失する事數知らぬ中に明堂殿もまろびぬこの内には木にて人形を造りて宮殿を金にて作りて入れたる寶あり眼をあてては見ぬものなりおのづからも誤りて見つる人は目のつぶれけるぞ恐しき陰陽寮の守護神の社もまろびぬ山の文殊樓稻荷の中の宮なども吹き損ひてすべて來し方行く末も例ありがたき風なり西國の方には人の家をさながら吹きあぐれば内なる人は塵のやうに落ちて死に失せなどしけるぞ珍らかなるあまりにかく夥しき風なれば御占行はれけるにも重き人の御つつしみ輕からぬなど奏しけり

【一二六】 果してその頃西園寺の太政大臣なやましくし給ふとて山々寺々修法讀經祭祓などかしがましくひびきののしりつれどそれもかひなくて十月十二日失せ給ひぬ入道殿をはじめ思しなげく人々かず知らず中宮も御服にて出でたまひぬ

第十 あすか川

【二二七】 ひまゆく駒の足にまかせて文永も五年になりぬ正月二十日本院のおはします富小路殿にて今上の若宮御五十日きこしめすいみじうきよらを盡さるべし今年正月に聞あり後の二十日餘の程に冷泉院にて舞御覽あり明けむ年一院五十に満たせ給ふべければ御賀あるべしとて今より世のいそぎにきこゆ

【二二八】 かやうに聞ゆる程にむくりの軍といふ事おこりて御賀とどまりぬ人々口をしく本意なしと思す事かぎりなし何事もうちさましたるやうにて御修法や何やと公家武家ただこのさわぎなりされども程なくしづまりていとめでたし

【二二九】 かくて今上の若宮六月二十六日親王の宣旨ありておなじき八月

二十五日坊に居給ひぬかく花やかなるにつけても入道殿はあさましく思さる故大臣の先立ち給ひしなげきに沈みてのみ物し給へどかかる世のけしきをかしこく見給はぬよと思しなぐさむ中宮は御服の後も参り給はず萬ひきかへ物うらめしげなる世の中なり

【二三〇】 一院は御本意遂げ給はむ事をやうやう思すその年の九月十三夜白河殿にて月御覽するに上達部殿上人例の多く参りつどふ御歌合ありしかば内の女房ども召されて色々の引物源氏五十四帖の心様々の風流にして上達部殿上人までも分ちたまはず院の御製

我のみや影もかはらむあすか川おなじ淵瀬に月はすむとも
かねてより袖もしぐれて墨染のゆふべ色ます峯のみぢ葉

この御歌にてぞ御本意の事おぼし定めけりと皆人袖をしぼりて聲もかはりけりあはれにこそ民部卿入道爲家判せさせられけるにも身をせめ心を碎きてかきやる方も侍らすとかや奏しけり

【一三二】かくて神無月の五日龜山殿へ御幸なる今日をかぎりの御たびなれば心ことにととのへさせ給ふ新院も例のおはします大宮東二條ひとつ御車にておなじく渡らせ給ふまづ北野平野の社へ御まゐりあれば御隨身ども花ををりつくし今日をかぎりと同様あしきまでさうぞぎあへり兩社にて馬あげさせられけり神もいかに名残多く見給ひけむ空さへうちしぐれて木の葉さそふ嵐もをり知り顔に物悲しう涙あらそふ心地し給ふ人々多かるべし中務の御子今日の袂さぞしぐるらむと宣ひし御返中將
袖ぬらす今日をいつかと思ふにもしぐれてつらき神無月かな

【一三三】やがてその夜御ぐしおろし給ひぬ御戒の師には青蓮院の法親王まゐり給ふその頃やがて御逆修はじめさせ給へばその程女院いろいろの御捧物ども奉り給ふ今はいよいよ法の道をもてなさせ給ひつつ或時は止觀の談義或時は眞言の深き沙汰淨土の宗旨などを尋ねさせ給ひつつよろづに御心通ひ暗からずものし給へば何事も前の世よりかしこくおはしましける程あらはれて今行末もげにたのもしくめでたき御有様なり

【一三四】そのころほひより法皇時々御惱あり世の大事なれば御修法どもいかめしく始る何くれと騒ぎあひたれどおこたらせ給はで年もかへりぬ正月のはじめも院の内かいしめりていみじく物思ひ歎きあへり十七日龜山殿へ御幸なるこれや限と上下心細し法皇は御輿なり兩女院は例のひとつ御車にたてまつる尻に御匣殿さぶらひ給ふ道にて參るべき御せむじものを胤成師成といふ薬師ども御前にてしたためて銀の水瓶に入れて隆良の中納言承りて北面の信友といふに持たせたりけるを内野の程にて參らせむとて召したるにこの瓶に露ほどもなしいとめづらかなるわざなりさるほどの大事のものをあしく持ちてうちこぼすやうは如何でかあらむ法皇もいとど御臆病そひて心細く思されけり

【一三五】新院は大井川の方におはしまして隙なく男女房上下となく今のほど如何に如何にと聞えさせ給ふ御使の行きかへる程を猶いぶせがらせ給ふに正月も立ちぬ如何様におはしますべきにかと誰も誰も思しまどふ事かぎりなしかねてよりかやうのためと思しおきてける壽量院へ二月七

日わたり給ふここへはおぼろげの人は参らず南松院の僧正淨金剛院の長老覺道上人などのみ御前にて法の道ならでは宣ふ事もなし六波羅北南御とぶらひに参れり西園寺大納言實兼例の奏し給ふ

【一三五】十一日行幸あり中一日わたらせ給へば泣く泣く萬の事を聞えおかせ給ふ新院も御對面あり御門は御本性いと花やかにかしこく御才なども昔に恥ぢず何事もとのほりてめでたくおはします世を治めさせ給はむ事もうしろめたからず思せば聞え給ふすぢことなるべし

【一三六】十七日の朝より御氣色かはるとて善智識召さる經海僧正往生院の聖などまゐりてゆゆしき事ども聞え知らすべし遂にその日の酉の時に御年五十三にてかくれさせ給ひぬ後嵯峨院とぞ申すめる今年は文永九年なり院の中くれふたがりて闇にまよふ心地すべし

【一三七】十八日に藥草院に送り奉り給ふ仁和寺の御室圓滿院聖護院菩提

院青蓮院皆御供つかまつらせ給ふ内より頭中將御使にまゐる三十年が程世をしたためさせ給ひつるに少しの誤なく思すままにて新院御門春宮動きなく又外様に分るべき事もなければ思しおくべき一ふしもなしなき御跡まで人の靡きつかうまつれる様來し方もためしなき程なり

【一三八】二十三日御初七日に大宮院御髪おろさるその程いみじく悲しき事多かり天の下おしなべて黒み渡りぬ萬しめやかに哀なる世のけしきに心あるも心なきも涙催さぬはなし院内の御歎はさる事にて朝夕睦じく仕う奉りし人々の思ひ沈みあへる様ことわりにも過ぎたりその中に經任の中納言は人よりことに御覺ありき年も若からねば定めて頭おろしなむと皆人思へるになよらかなる狩衣にて御骨の御壺持ちまゐらせて参れるを思のほかにもと見る人思へり

【一三九】權中納言公雄と聞ゆるは皇后宮の御兄なり早うより故院いみじくらうたがらせ給ひて夜晝御傍去らず候ひて明暮つかうまつらせ給ひし

かばかぎりある道にも後らかし給へることを若きほどにやる方なく悲し
と思ひ入り給へり西の對の前なる紅梅のいと美しきを折りて具氏の宰相
中將かの中納言に消息きこゆ

梅のはな春は春にもあらぬ世をいつと知りてか咲き匂ふらむ
かへし

心あらばころもうき世の梅の花をり忘れずばにははざらまし

【二四〇】夜さり對面に何事も聞えむといへるをこの中將も故院の御いと
ほしみの人にて同じ心なる友に覺えければいと哀にて悲しき事も語りあ
はせむと日ぐらし待ち居たるに遂に見えずあやしと思ふにはやその夜頭
おろしてけり齡も盛に今も皇后宮の御兄春宮の御伯父なれば世覺おとる
べくもあらず思ひなしも頼もしくほこりかなるべき身にてかく捨てはつ
る程いみじく哀なれば皆人いとほしう悲しき事にいひあつかふめり經任
の中納言にはこよなき心ばへにや父大臣も院の御事をつきせず歎き給ふ
に打ち添へていみじと思す

【二四一】あはれに悲しといひつつもとまらぬ月日なれば故院の御日數も
程なう過ぎ給ひぬ世の中は新院かくておはしませば法皇の御代に引きう
つしてさぞあらむと世の人もおもひ聞えけるに當代の御ひとつすぢにて
あるべきさまの御おきてなりけり長講堂領また播磨の國尾張の熱田の社
などをぞ御處分ありけるいづれの年なりしにか新院六條殿に渡らせ給ひ
し頃祇園の神輿たがひの行幸ありしとき御對面のやうを故院へ尋ね申さ
れたりしにも我と等しかるべき御事なれば朝覲になぞらへらるべしと申
されけり一つ腹の御兄にてもおはしますかたがたことわりなるべき世を
思の外にもと思ふ人々も多かるべしいでや位におはしますにつきてさし
あたりの御政事などはことわりなり新院にも若宮おはしませば行末のひ
とふしはなどかはなど言ひしるふ

【二四二】かかればいつしか院方内方と人の心々も引きわかるるやうにう
ちつけ事ども出できけり人ひとりおはしませぬあとはいみじきものにぞ
ありける朝の御まもりとて田村の將軍より傳はり参りける御佩刀などを

もかの御氣色のしかおはしましけるにや御かくれの後やがて内裏へ奉らせ給ひにしかばそれなどをぞ女院のうらめしき御事には院も思ひ聞えさせ給ひけるさてしもやはなればこのよしをも關の東へぞのたまひ遣しける

【一四三】内には花山院の太政大臣後院の別當になされて世の中みづからしたためさせ給ふもとよりいと花やかに今めかしき所おはする君にてよろづかどかどしうなむ皇后宮かくれさせ給ひにし後は盡きせぬ御歎さめがたうてところせき御有様もよだけういかで本意をも遂げてばやなど思されけり故院の御はても過ぎさせ給へば世の中色改りて花やかに人々の御歎の色もうすらぎ行くしもあはれなる習なりかし

【一四四】その夏春宮例にもおはしまさで日比經れば内のうへ御胸つぶれて御修法や何やと騒がせ給ふ和氣丹波の薬師ども夜晝さぶらひて御薬の事色々につかうまつれどただ同じ様にのみおはすいかなるべき御事にか

といとあさましようて上もつと此の御方に渡らせ給ひて見奉られ給ふに御目の中おほかた御身の色などもことの外黄に見えければいと怪しうて御虎子を召寄せて御覽せらる紙を浸して見せらるるにいみじう濃く出でたる黄皮の色なりいとあさましくなかばかりの事を知り聞えざらむとて御氣色あしければ薬師どもいたう畏り色を失ふ

【一四五】かばかりになりては御やいとなくてはまがまがしき御事いで來べしとおのおの驚き騒ぐいまだ例なきことは如何あるべきと定めかねらる位にてはただ一度例ありけり春宮にては未ださる例なかりけれどいかがはせむとて思し定む七にならせ給へばさらでだに心苦しき御程なるにまめやかにいみじとおぼす薬師と大夫君一人召し入れて又人も參らず御門の御前にて五所ぞせさせ奉らせ給ひける御乳母どもいと悲しと思ひていぶかしうすれどをさをさゆるさせ給はず宮いとあつくむづかしう思せど大夫につといだかれ給ひて上の御手をとらへよろづに慰め聞えさせ給ふ御氣色のあはれにかたじけなさを稚き御心に思し知るにやいとおとな

しく念じ給ふかくて後程なくおこたらせ給ひぬればめでたく御心おちる給ひぬ

【二四六】かくて今年も暮れぬ上はいよいよ世の中のあわただしう思されておりゐなむの御心づかひすめり位におはしましては十五年ばかりにやなりぬらむいまだ三十にも遙に足らぬ程の御齡なれば今ぞさかりに若う清らなる御程なめる

第十一草まくら

【二四七】文永十一年正月二十六日春宮に位譲り申させ給ふ二十五日夜まづ内侍所劔璽ひき具して押小路殿へ行幸なりて又の日殊更に二條内裏へわたされけり九條の攝政殿まゐり給ひて藏人召して禁色仰せらる上は八にならせ給へばいと小く美しげにてびむづらゆひて御引直衣うち御衣はりばかま奉れる御氣色おとなおとなしうめでたくおはするを花山院内大

臣扶持し申さるるを故皇后宮の御兄公守の君などはあはれに見給ひつつ故大臣宮などのおはせましかばと思し出づ

【二四八】本院は故院の御第三年のこと思し入りて睦月の末つ方より六條殿の長講堂にて哀にたふとく行はせたまふ御指の血をいだして御手づから法華經など書かせ給ふ衆僧も十餘人がほど召しおきて懺法などよませらる御おきての思はずなりしつらさをもおぼし知らぬにはあらねどそれもさるべきにこそはあらめといよいよ御心をいたして懇にけうじ申させ給ふさまいとあはれなり新院もいかめしう御佛事嵯峨殿にて行はる

【二四九】新院は世をしろしめす事かはらねばよろづ御心のままに日頃ゆかしくおぼしめされし所々いつしか御幸しげう花やかにて過させ給ふいとあらまほしげなり本院は猶いとあやしかりける御身の宿世を人の思ふらむ事もすさまじう思しむすばほれて世を背かむのまうけにて尊號をかへし奉らせ給へば兵仗をも止めむとて御隨身どもめして祿かづけ暇た

まはするほどいと心細しと思ひあへり大方のありさまうち思ひめぐらすもいと忍び難き事多くて内外の人々袖どもうるほひわたる院もいと哀なる御氣色にて心づよからず今年三十三にぞおはします

【一五〇】故院の四十九にて御髪おろし給ひしをだにさこそは誰も誰も惜み聞えしか東の御方もおくれ聞えじと御心づかひし給ふさならぬ女房上達部の中にもとりわき睦じうつかまつる人三四人ばかり御供つかまつるべき用意すめればほどほどにつけて私も物心細う思ひ歎く家々あるべしかかる事どもあづまにも聞え驚きて例の陣のさだめなどやうにこれかれあまた武士どもよりあひよりあひ評定しけり

【一五一】この頃はありし時頼朝臣の子時宗相模守といふぞ世の中はからふ主なりける故時頼朝臣は康元元年に頭おろして後忍びて諸國を修行しあるきけりそれも國々の有様人のうれへなど委しくあなぐり見聞かむの謀にてありけるあやしの宿に立ち寄りてはその家主がありさまを問ひ聞

きことわりある愁などの埋もれたるを聞きひらきては我はあやしき身なれど昔よろしき主をもち奉りしいまだ世にやおはすると消息奉らむもてまうでて聞え給へなどいへばなでう事なき修行者の何ばかりかはとは思ひながら言ひ合せてその文をもちて東へ行きてしかじかと教へしままにひて見れば入道殿の御消息なりけりあなかまあなかまとて永く愁なきやうに計らひつ佛神のあらはれたまへるかとてみな額をつきて悦びけりかやうの事すべて數しらずありしほどに國々も心づかひをのみしけり最明寺入道とぞいひける

【一五二】その子なればにや今の時宗朝臣もいとめでたきものにて本院のかく世をおぼし捨てむずるいとかたじけなく哀なる御事なり故院の御おきてはやうこそあらめなれどそこの御このかみにてさせる御あやまりもおはしまさざらむいかでかは忽ちに名残なくはものし給ふべきいとたいたいしきわざなりとて新院へも奏し彼方此方なだめ申して東の御方の若宮を坊に立て奉りぬ十一月五日節會行はれていとめでたしかかれは少

し御心慰めてこのきは強ひて背かせ給ふべき御道心にもあらねば思し止まりぬこれぞあるべき事とあいなう世人も思ひいふべし御門よりは今二ばかりの御兄なり

【一五三】儲の君御年まされる例遠き昔はさておきぬ近頃は三條院小一條院高倉院などやおはしましけむ高倉院の御末ぞ今もかく榮えさせおはしませばかしこきためしなめりいにしへの天智天皇と天武天皇とはおなじ御腹の御兄弟なりその御末しばしばうちかはりうちかはり世をしろしめしし例などをも思ひや出でけむ御二流にて位にもおはしまさなむと思ひ申しけり新院は御心ゆくとしもなくやありけめど大方の人めには御中いとよくなりて御消息も常に通ひ上達部なども彼方此方参り仕うまつれば大宮院もめやすく思さるべし

第十一 老のなみ

【一五四】建治三年正月三日の上御冠したまふ十一にぞならせ給ふらむかし御諱世仁と聞ゆひきいは關白太政大臣殿理髮頭中將基顯御あげまき大炊御門大納言信嗣の君仕うまつられけり御遊はじまる琵琶今出川の大納言和琴信嗣の大納言箏の琴殿の大納言の君にておはせしなめり屯食祿などの事常のごとし

【一五五】二十二日朝覲の行幸龜山殿へなりしかば上達部殿上人例のいろいろのえり下襲織物打物めでたくゆゆしかりき御前の大井川に龍頭鷓首浮べらる夜に入りて鶺鴒どもめして篝火ともして乗せらる御前の御遊地下の舞など様々の面白き事ども例の事なればうるさくてさのみもえ書かず同三月廿六日石清水の社へ行幸四月十九日賀茂の社へ行幸何れもめでたかりき人々さだめて記しおき給へらむと譲りてとめ侍りぬ

【一五六】かくて弘安元年になりぬ十月ばかりまた二條内裏に火いで來ていみじうあさまし萬里小路殿はありし火の後又造られて今年の八月に御

わたましありて新院住ませ給へれど内裏焼けぬればこの院また内裏になりぬうちつづき火のしげさいとおそろし

【一五七】例の五月の供花やがてうち續きければ女院たち宮々など夜の御時に關伽奉らせ給へば御堂のかをり名香の香も外には多くまさりていとしみ深うなまめかしうおもしろし大方いづれも年に二度は昔よりの事にていみじうけいめいし給へば世の人のなびき仕う奉るさま限りなし日に二たび院の出で居させ給ふに關白大臣以下やむごとなき人々絶えずさぶらひたまふ大中納言二位三位非參議四位五位などはましてかずしらすずべて前の司道々の人々道なども參る事なれば時ならぬ院の御前ともなくいみじう花やかにおもしろう尊し昔の後二條關白師通と聞えしはおりの御門の門に車の立つべき事なしとそしりたまひけるに今の世を見給はばと思ひ出でらる九月の供花には新院さへわたりものし給へばいよいよ女房の袖口心ことに用意加へ給ふ

【一五八】御花はつれば兩院ひとつ御車にて伏見殿へ御幸なる秋山の景色御覽せさせむとなりけり上達部殿上人かなたこなたおしあはせていろいろの狩衣すがた菊紅葉こきませてうち群れたる見所多かるべし野山のけしき色づき渡るに伏見山田面につづく宇治の川浪遙々と見わたされたるほどいと艶なるを若き人々などは身にしむばかり思へり鷹司殿の大殿も參りたまふべしと聞えけるを御物忌とてとまり給へれば五葉の枝につけて奏せられける

伏見山いくよろづ代も枝そへてさかえむ松のすゑぞひさしき御かへし

さかゆべきほどぞひさしき伏見山おひ添ふ松の枝をつらねて

【一五九】又の日は伏見の津に出でさせ給ひて鶺鴒船御覽じ白拍子御船に召入れて歌うたはせなどせさせ給ふ二三日おはしませば兩院の家司ども我劣らじといかめしき事ども調じて參らせあへる中に楊梅の二位兼行檜破子どもの心ばせありて仕う奉れるに雲雀といふ小鳥を萩の枝につけたり

源氏の松風の巻を思へるにやありけむ爲兼朝臣を召して本院かれはいかが見ると仰らるればいと心え侍らずとぞ申してける誠に定家の中納言入道が書きてはべる源氏の本には萩とは見え侍らぬとぞうけたまはりし

【一六〇】この御代にもまた勅撰の沙汰をとどしばかりより侍りし爲氏大納言えらばれつるこのしはすにぞ奏せられける續拾遺集と聞ゆ魂あるさまにはいたく侍らざめれど艶には見ゆると時の人々申し侍りけり續古今のひきうつしおぼろげの事はたちならび難くぞ侍るべき

【一六一】その頃蒙古おこるとかやいひて世の中さわぎ立ちぬいろさまざま恐しう聞ゆれば本院新院はあづまへ御下りあるべし内春宮は京に渡らせたまひて東の武士ども上り候ふべしなど沙汰ありて山々寺々御祈かずしらす伊勢の勅使に經任大納言まゐる新院も八幡へ御幸なりて西大寺の長老召されて眞讀の大般若供養せらるる太神宮へ御願に我が御代にしもかかる亂出できて誠にこの日本のそこなはるべくば御命を召すべきよ

し御手づから書かせたまひけるを大宮院いとあさましきことなりと猶諫め聞えさせ給ふぞことわりにあはれなる東にもいひ知らぬ祈どもこちたくののしる故院の御代にも御賀の試樂の頃かかる大事ありしかど程なくこそしづまりにしをこの度はいとにがにがしう牒状とかや持ちて參れる人などありてわづらはしう聞ゆれば上下思ひまどふ事かぎりなし

【一六二】されども七月一日おびただしき大風吹きて異國の船六萬艘兵乗りて筑紫へよりたる皆吹き破られぬればあるは水に沈みおのづから残れるもなく本國へ歸りにけり石清水の社にて大般若供養說法いみじかりける刻限に晴れたる空に黒雲一むら俄に見えてたなびくかの雲の中より白き羽にてはぎたる鎬矢の大なる西をさして飛び出でて鳴る音おびただしかりければ彼處には大風の吹き來ると兵の耳には聞えて浪荒くたち海の上あさましくなりて皆沈みにけるとぞ猶吾が國に神のおはします事あらたに侍りけるにこそ

【一六三】 さて爲氏の大納言伊勢の勅使にて上る道より申しおくりける

勅をしていのるしるしの神風に寄せくる浪ぞかつくだけつる
かくてしづまりぬれば京にも東にも御心どもおちゐてめでたさ限りなし
かの異國の御門心うしと思して湯水をも召さず我いかにもしてこの度日
本の帝王に生れてかの國を亡す身とならむとぞちかひて死に給ひけると
ぞ聞き侍りしまことにやありけむ

【一六四】 同じ六年正月六日日吉の社の訴訟勅裁なしとて御輿は都へ入ら
せ給ふ六波羅の武士どもけしきばかり防ぎ奉りけれどまめやかには神に
むかひ奉りて弓射るものなければ紫宸殿清涼殿などにふり棄て參らせて
山法師はのぼりぬ御門は急ぎ對屋に出でさせ給ひて腰輿にて近衛殿へ行
幸なる殿上人ども柏ばさみして仕うまつりけり七日の節會もまほには行
はれずそれより三條坊門萬里小路の通成の大臣の家へ行幸なりてしばし
内裏になりし時萬里小路おもての四足はたてられ侍りき

【一六五】 何となく過ぎ行くほどに弘安も十年になりぬこの御門位に即か
せ給ひて十三年ばかりにやなりぬらむ本院待遠に思さるらむといとほし
く推し量り奉るにや例の東より奏する事あるべし新院の御方さまには心
細う聞召しなやむべし去年の春御乳母の按察の二位殿うせにしかば一め
ぐりの佛事に龜山殿へおはしましていかめしう八講行はせたまふ日雪い
たう降りければ九條三位隆博檜扇のつまををりて

跡とめてとはるる御代の光をや雪のうちにもおもひ出づらむ
女房の中に聞えたるを院御覽じて返しにのたまふ
なき人のかさねし罪も消えねとて雪のうちにも跡をとふかな

【一六六】 よろづ飽かず思さるる程なれどその年の十月におりゐさせ給ふ
もとの上は二十一にぞならせ給ひける御本性もいとうるはしくのどめた
るさまにおぼしてすくよかに御才もかしこうめでたうおはしませば御政
事などもやうやう譲りや聞えましなど思されつるにいとあへなくうつろ
ひぬる世をすげなく新院は思さるべし春宮位に即き給ひぬれば天下本院

におしうつりぬ世の中おしわかれて人の心どももかかる際にぞあらはれる今の御門も故山階の大臣の御孫にてわたらせ給へばかの殿ばらのみぞいづ方にもすさめぬ人にておはしける

第十三 今日のひかげ

【一六七】 正應元年三月十五日官廳にて御即位ありこのほどは香園院の左のおとど師忠關白にておはしきその後近衛殿また九條左大臣殿その後また近衛殿かへりなりたまひきなほ後に歡喜園院などいとしげうかはり給ふおりぬの御門を今は新院と聞ゆれば太上天皇三人世におはします頃なりいと珍しく侍るにや

【一六八】 年かへりて正應も二年になりぬよろづめでたき事ども多くて三月二十三日鳥羽院へ朝覲の行幸なる本院はかねてより鳥羽殿におはしまして池の水草かき拂ひいみじうみがかれて例のことごとしき唐の御船浮

べられて二十四日に舞樂ありき二十六日にぞ歸らせ給ひけるさても去年の三月三日かとよ經氏の宰相の女の御腹に若宮出來させ給へりしを太子に立て奉らせ給ふいとかしこき御宿世なり中宮の御子にぞなし奉らせ給ひけるおなじうは誠にておはせましかばとぞ大將殿などおぼしけむかしおりぬの御門も御子あまたおはしませば坊になど思しけるをひきよぎぬるいと本意なし十月二十五日一院の御所にてまなきこしめすいとめでたき事どものしり過ぎもてゆく

【一六九】 同じき三年三月四日五日の頃紫宸殿の獅子狛犬中よりわれたる驚きおぼして御占あるに血流るべしとかや申しければいかなる事のあるべきにかと誰も誰も思しさわぐにその九日の夜右衛門の陣よりおそろしげなる武士三四人馬に乗りながら九重の中へ馳せ入りて上に昇りて女孺が局の口に立ちてややといふものを見あげたれば丈高くおそろしげなる男の赤地の錦の鎧直垂に緋威の鎧着て只赤鬼などのやうなる面つきにて御門はいづくに御よるぞと問ふ夜のおとどにいらふればいづくぞと又

問ふ南殿より東北の隅と教ふれば南ざまへ歩みゆく間に女孺内より参りて權大納言典侍殿新内侍殿などに語るうへは中宮の御方に渡らせ給ひければ對の屋へ忍びて逃げさせ給ひて春日殿へ女房のやうにていと怪しきさまをつくりて入らせ給ふ内侍劔璽を取りて出づ女孺は玄象鈴鹿とりて逃げけり春宮をば中宮の御方の按察殿抱き参らせて常磐井殿へ徒歩にて逃ぐその程の心の中どもいはむ方なしこの男をば淺原のなにがしとかいひけり

【一七〇】辛くして夜のおとどへ尋ね参りたれども大かた人もなし中宮の御方の侍の長景政といふもの名のり参りていみじく戦ひ防ぎければ疵かうぶりなどしてひしめくかかる程に二條京極の篝屋備後守とかや五十餘騎にて馳せ参りて鬨をつくるに合する聲僅に聞えければ心やすくて内にまゐる御殿どもの格子ひきかなぐりて亂れ入るにかなはじと思ひて夜の御殿の御茵のうへにて淺原自害しぬ太郎なりける男は南殿の御帳の内にて自害しぬ弟の八郎といひて十九になりけるは大床子のあしの下にふし

て寄るものの足をきりきりしけれどもさすが數多して搦めむとすればかなはで自害すとして腸をば皆繰り出して手にぞ持たりけるそのままながらいづれをも六波羅へかき續けて出しけり

【一七一】ほのぼのと明くる程に内春宮御車にて忍びて歸らせ給ひて晝つ方ぞ又更に春日殿へなる大方雲の上穢れぬればいかにて中宮の日の御座へ腰輿よせて兵衛の陣より出でさせ給ふ春宮は絲毛の御車にて又常磐井殿へわたらせ給ふ中宮も春日殿へ行啓なる世の中ゆすり騒ぐさま言の葉もなし

【一七二】この事次第に六波羅にて尋ね沙汰するほどに三條の宰相中將實盛も召し捕られぬ三條の家につたはりて鯨尾とかやいふ刀のありけるをこの中將日比持たれたりけるにてかの淺原自害したるなどいふ事ども出でてきて中院も知ろしめしたるなどいふ聞えありて心うくいみじきやうにいひあつかふいとあさまし

【一七三】 中宮の御兄權大納言公衡一院の御前にてこのことは猶禪林寺殿の御心合せたるなるべし後嵯峨院の御處分を引きたがへあづまよりかく當代をもすゑ奉り世をしめさする事を心よからず思すによりて世をかたづけ給はむの御本意なりさてなだらかにもおはしまさばまさる事や出でまうで來む院をまづ六波羅にうつし奉らるべきにこそなごかの承久の例も引き出でつべく申し給へばいとほしうあさましと思していかでかさまではあらむじちならぬ事をも人はよく言ひなすものなりかし故院のなき御影にも思さむ事こそいみじけれと涙ぐみてのたまふを心弱くおはしますかなと見奉り給ひて猶内よりの仰などきびしき事ども聞ゆれば中の院も新院も思し驚くいとあわただしきやうになりぬれば如何はせむにてしろしめさぬよし誓ひたる御消息などあづまへ遣されて後ぞ事しづまりにける

第十四 つげの小櫛

【一七四】 さて石清水の流をわけて關の東にも若宮ときこゆる社おはしますに八月十五日都の放生會をまねびて行ふそのありさま誠にめでたし將軍もまうで給ふ位あるつはもの諸國の受領どもなどいろいろの狩衣思ひ思ひの衣かさねて出立ちたり赤橋といふ所に將軍御車とどめて下り給ふ上達部はうへのきぬなるもあり殿上人などいと多く仕うまつれりこの將軍は中務の宮の御子なりこのころ權中納言にて右大將かね給へれば御隨身ども花を折らせてさうぞきあへるさま都めきておもしろし法會のありさまも本社にかはらず舞樂田樂獅子がしら流鏑馬などさまざま所にしつけたる事どもおもしろし十六日にも猶かやうの事なり棧敷どもいかめしく造り竝べていろいろ幔幕などひき續けて將軍の御棧敷の前には相模守をはじめそらの武士ども竝居たるけしきさまかはりて好ましよううけぱりたる心地よげに所につけては又なく見えたり

【一七五】 その後いくほどなく鎌倉より騒がしき事出で來て皆人きもをつぶしさざめくといふ程こそあれ將軍都へ流され給ふとぞ聞ゆるめづらし

き言の葉なりかし近く仕うまつる男女いと心細く思ひ歎きたとへば御位などのかはる氣色に異ならずさて上らせ給ふありさまいとあやしげなる網代の御輿を逆に寄せて乗せ奉るもげにいとまがまがしき事のさまなりうちまかせては都へ御上りこそいとおもしろくもめでたかるべきわざなれどかくあやしきは珍かなり

【一七六】 文永三年より今年まで二十四年將軍にて天下のかためといつかれ給へれば日の本の兵をしたがへてぞおはしましたるに今日は彼等にくつがへされてかくいとあさましき御有様にてのほり給ふいとほしうあはれなり道すがらも思し亂るるにや御たたう紙の音しげう漏れ聞ゆるにたけきもののふも涙おとしけり

【一七七】 さてこのかはりには一院の御子御母は三條内大臣の御むすめ御匣殿とて候ひ給ひし御腹なり當代の御はらからにて今少しよせ重くやんごとなき御有様なれば只受禪の心地ぞしけるもとの將軍おはせし宮をば

造り改めていみじうみがきなすつはもの勝れたる七人御むかへに上る中にいひぬまの判官といふもの前の將軍のぼり給ひし道もまがまがしければあとをも越えじとて足柄山をよぎて上るなどぞあまりなる事にや皇子は十月三日御元服したまひて久明親王ときこゆおなじき十日院よりやがて六波羅の北方さきさまも宮のわたりたまひし所へおはしてそれよりぞ東に赴かせ給ふ

【一七八】 同二十五日鎌倉へつかせ給ふにも御關むかへとてゆゆしき武士どもうちつれて參る宮はきくのとれむじの御輿に御簾あげて御覽じ習はぬえびすどものうち園み奉れるたのもしく見給ふしのぶをみだれ織りたる萌黄の御狩衣紅の御衣濃き紫の指貫奉りていと細やかになまめかしいひぬまの判官とくさの狩衣青毛の馬に金のかなものの鞍置きて隨兵いかめしく召し具して御輿のきはにうちたり都にたとへば行幸にしかるべき大臣などの仕うまつり給へるによそへぬべし

【一七九】三日が程はわうばむといふ事又馬御覽何くれといかめしき事ども鎌倉うちのけいめいなり宮の中のかざり御調度などは更にもいはず帝釋の宮殿もかくやと七寶を集めて磨きたるさま目もかがやく心地すいとあらまほしき御有様なるべし關の東を都のほかとおとしむべくもあらざりけり都におはしますなま宮たちのより所なくただよはしげなるにはこよなく勝りてめでたく賑ははしく見えたり

【一八〇】時宗朝臣といひしも又頭おろして法光寺の入道とていとたふとく行ひて世にもいろはず太郎貞時の相模守といふにぞよろづ言ひつけけるさても上り給ひにし前大將殿は嵯峨のほとりに御ぐしおろしいとかすかにさびしくてぞおはしける

【一八一】かくて年かはりぬその年二月の頃一院御髪おろし給ふ年月の御本意なれどたゆたひ過し給ひけるに禪林寺殿去年の秋思し立ちにしにとど驚かされ給ひぬるにやありけむ二月十一日龜山殿にていむ事うけさ

せ給ふ四十八にぞならせ給ふ御法名素實と申すなり

【一八二】程なく明け暮れて永仁も六年になりぬ七月二十二日春宮に御位譲りており給ひぬ霜月になりて五節の頃去年を思し出でてそのをりに關白にておはせし兼忠のおとどに櫛つかはすとて新院

少女子がさすや小櫛のそのかみをともし馴れにし時ぞ忘れぬ
御かへし歡喜園前攝政殿

いとど又去年の今宵ぞ忍ばるるつけの小櫛を見るにつけても

【一八三】正安二年正月三日御門御元服したまふ今年十三にならせ給へば御行末はるかなる程なり又の年正月の頃内侍所の御しめのおり給へるはいかなるべき事になど忍びてささめく程こそあれ東よりの御使のぼるとして世の中さわぎで禪林寺殿見奉り給ふ世にとや正月二十一日春宮御位に即かせ給ひぬおりぬの御門御年十四にて太上天皇の尊號ありいとさびはにいたはしき御事なるべし僅に三年にておりさせ給へれば何事のはえ

もなしこの春は春日社に行幸などあるべしとて世の中まだきよりおもしろき事にいひあへりつるもかいしめりていとさうざうしさてこの君を新院と申せば父の院をば中院ときこゆ御門の御父は一の院と申す法皇もこのころは一所におはしますなめり一院世の政事きこしめせば天下の人又おしかへし一方になびきたる程もさも目の前にうつろひかはる世の中かなとあぢきなし

【一八四】土御門の前の内の大臣定實六月に太政大臣になりたまふいとめでたし故大納言入道顯定の本意なかりし御おもておこし給へるいとゆゆし院の御おぼえの人なるうへ才もかしこくおはすれば世に用ひられ給へり御子の大納言雅房中納言親定とていづれも才ある人にておはしき持明院殿には世の中すさまじく思されて伏見殿に籠りおはしますべく宣へれど二の御子坊に定まり給へば又めでたくてなだらかにておはしますべし先に聞えつる御母女院の御はらからの姫君顯親門院と聞えし御腹なり八月十五日まづ親王になし奉らせ給ひて同二十四日に春宮に立ち給ひぬ

【一八五】かくて新帝は十七になり給へばいと盛りに美しう御心ばへもあてに氣高うすみたるさましてしめやかにおはします三月二十四日御即位この行幸の時花山院三位中將家定御劔の役をつとめ給ふとてさかさまに内侍に渡されけるを今出川の大御覽じ咎めて出仕とどめらるべきよし申されしかど鷹司の大殿なかなか沙汰がましくてあしかりなむただ音なくてこそと申しとどめ給へりしこそなさけ深く侍りしか後に思へばけにあさましきことのしるしにや侍りけむ十月二十八日御禊この度の女御代にも堀川の大御の姫君いで給へり今のうへも源氏の御腹にてもものし給ふいと珍しくやむごととなしされどうけばかりたるさまにはおはせぬぞ心もとなかめる

【一八六】又の年は乾元元年六月十六日龜山殿へ行幸あり法皇いと珍しくうつくしと見奉らせ給ふ曉歸らせ給ひぬるのち法皇より内に聞えさせ給ふ

したはるる名残にたへず月を見れば雲の上にぞ影はなりぬる

御かへし内のうへ

君はよし千歳のよはひ保てればあひ見むことの數も知られず

【一八七】かくて又の年春の頃より東二條院御惱日々におもり給ひて今はと見えさせ給へば伏見殿へ出でさせ給ひて遂にうせさせ給ひぬ七十に餘らせ給へばことわりの御事なり法皇もその御なげきの後をさをさ物聞しめさずなどありしをはじめにてうち續き心よからず御わらはやみなど聞ゆる程に七月十六日二條富小路殿にてかくれさせ給ひぬ六十二にぞならせ給ひけるいとあはれに悲しき事どもいへばさらなり御孫の春宮も一つにおはしましたしつれば急ぎて外へ行啓なりぬ御修法の壇どもこぼこぼと毀ちてくづれ出づる法師原のけしきまで今を限りととぢめはつる世のありさまいと悲し宵過ぐるほどに六波羅の貞顯憲時二人御とぶらひに參れり京極おもての門の前に床子にしり掛けてさぶらふ隨ふものども左右になりみわたるさまいとよそほしげなり

【一八八】又の日夜に入りて深草殿へゐてわたし奉る御車さし寄せて御棺乗せ奉る程うちとよみあひたるいとことわりに心をさむる人もなし院の御前宮たちなど藁履とかやいふもの奉りて門まで御送つかまつらせ給ひてとみにもえのぼらせ給はず御直衣の袖をおしあてて遙に程經てぞ御車にたてまつりて伏見殿へ御おくりもせさせ給ひける院のうちゆゆしきままで泣きあへり後深草院とぞきこゆる御日數のほどは伏見殿に宮たち遊義門院などおはします秋さへ深くなり行くままによととの御涙ひる間なく思しまどふ遊義門院

物をのみ思ひねざめにつくづくと見るも悲しきともし火の色
春着てし霞のころも乾さぬ間にこころもくるるあきぎりの空

【一八九】年かへりぬれば嘉元も三年になりぬ萬里小路殿の法皇また御惱とて龜山殿へ遷らせ給ふいろいろに御修法や何くれ御祈どもこちたくせさせ給へるもしるしなくて九月十五日のあけぼのに終にかくれさせ給ひぬ去年今年の世のさがなさ打續きたる人々の御歎どもいはむ方なし

【一九〇】 さてしもあらぬ習なれば同じ十七日に御わざの事せさせたまふことわりといひながらいといかめしう人々仕う奉り給ふよそほしかりつる御ありさまもいとほどなく只ときの間の煙にてのぼり給ひぬれば誰も誰も夢の心地してほのぼのと明けゆく程におのおのまかで給ふ三條大納言入道公貫萬里小路大納言師重などはとりわき御志深くて御茶毘のはつるまで墨染の袖を顔におし當てつつ候ひ給ふかねてより山道造られて木草きり拂ひなどせられつれど露けさぞ分けむ方なき涙の雨の添ふなるべし内よりの御使にはじめ長親朝臣雅行有忠朝臣など三度まゐるふるき例なるべし

【一九一】 院の二のみこの忠繼の宰相の女今は准后と聞ゆる御腹におはしますこの頃帥宮と聞ゆるを法皇とりわき御傍さらずならはし奉り給ひていみじうらうたがり聞えさせ給ひしかば人より殊に思し歎くべし頃さへ時雨がちなる空のけしきに山の木の葉も涙あらそふ心地していとかなし所がらしもいとどあはれを添へたり川浪のひびき戸無瀬の瀧の音までも

とり集めたる御心の中どもなり御日數のほどは帥宮ひとつ御腹の内親王などもこの院におはします程つれづれなるままにはかなし事など聞えかはして花紅葉につけても睦じくなれ聞え給ふべし

【一九二】 帥の御子は大多勝院の西の廂にわたらせ給ふ御前の松の木に這ひかかれる蔦の紅葉のいたう染めこがしたるをとりて九月三十日の夕つかた昭訓門院の御方へ奉らせたまふ

明日よりのしぐれも待たで染めてけり袖の涙や蔦のもみぢ葉木の葉よりももろき御涙はましていとどせきかね給へりし御かへし

四方はみな涙のいろにそめてけり空にはぬれぬ秋のもみぢ葉あはれに見奉らせ給ひつつ名残もいみじくながめられて高欄におしかかりたまへる夕ばえの御かたちいとめでたしありつる紅葉を西園寺大納言公顯の宿直所へ遣はす

雨と降るなみだの色やこれならむ袖より外にそむるもみぢ葉女院の御兄なればしめやかなる御山住の心苦しさにさぶらひたまふなり

けり御返事

いくしほか涙の色のそめつらむ今日をかぎりの秋のもみぢ葉

【一九三】 時雨はしたなく風あららかに吹きて暮れぬれば宮内に入り給ひて御殿油近くめして晝御覽じさしたる御經など讀み給ふほどに若殿上人どもうち連れて此方の御宿直にまゐれり晝の蔦の葉の散りぼひたるを人見るに宮それにおのおの歌かきてとのたまへば中將爲藤朝臣

もみぢ葉に泣く音はたえず空蟬のからくれなるも涙とや見む

清忠朝臣

山姫のなみだの色もこのごろはわきてやそむる蔦のもみぢ葉

光忠朝臣

世の中の歎のいろを知らねばや去年にかはらぬ蔦のもみぢ葉
これらをと集めて北殿の内親王の御方へ奉らせ給へれば
さすがなほいろは木の葉にのこりけり形見もかなし秋の別路

【一九四】 月日程なくうつりぬれば院も宮々もおのおのちりぢりにあかれ給ふほど今少し物悲しさまさる御心のうちどもは盡きせねど世のならひなればさのみしもはいかが昭慶門院はあまたの宮たちの御中に勝れてかなしきものに思ひ聞えさせ給ひしかば御處分などいとおはしましし程に向ひて離れたる院のあるをぞ奉らせ給へればそこにおはしましし程に川ばた殿の女院など人は申し侍りしかの所は臨川寺とぞいふめる都にも土御門室町にありし院いづれもこの頃は寺になりて侍るめりとぞめでたくこそあはれなれ

第十五 うら千鳥

【一九五】 露霜かさなりて程なく徳治二年にもなりぬ遊義門院そこはかたなく御惱と聞えしかば院のおぼしさわぐ事限なしよろづに御祈祭祓とのしりしかどかひなき御事にいとあさましくあへなし院もそれゆゑ御ぐしおろしてひたぶるに聖にぞならせ給ひぬるその程さまさまのあはれ

思ひやるべし悲しき事ども多かりしかどみなもらしつ

【一九六】かくて八月の初めつかたより内の上例ならずおはしますとてさまさまの御修法五壇薬師愛染いろいろの祕法ども諸社の奉幣神馬何かとののしり騒ぎつれどむげにふかくにならせ給ひて二十三日御氣色かはるとて世のひびきいはむ方なく馬車走りちがひ所もなきまで人々は参りこみたれどいとかひなく二十五日子の時ばかりにはてさせ給ひぬ火の消えぬるさまにてかきくれたる雲の上のけしきいはずともおしはかられなむまことや中宮は徳大寺の公孝の太政大臣の御女ぞかし珍しくかの御家にかかる事のいたくなかりつるに御おぼえもめでたくて候ひたまへるにあさましともいはむ方なし二十八日にまかで給ふ

【一九七】先帝の御わざのさたあり院號ありて後二條院とぞ聞ゆる堀川右大將具守御車寄せらる心のうちいかばかりかおはしけむ大將になり給へるもこの御門の西華門院むつまじうも仕う奉り給へるにいとほしき御事

なり御素服を着給はざりしをぞ思はずなる事に世の人もいひさたしける内侍のかむの君もさまかはり給ふ中宮も院號ありて長樂門院と聞ゆるよろづ哀なる事のみ書き盡しがたし

【一九八】春宮は正親町殿へ行啓なりて劔璽わたさる八月二十五日踐祚なり十二にぞならせ給ふ夢のうちの心地しつつも程なく過ぎうつる御日數さへはてぬれば盡せぬあはれさむる世なけれど人々もおのがちりぢりになる程今一しほ堪へがたげなり持明院殿にはいつしかめでたき事どものみぞ聞ゆる大覺寺殿には遊義門院の御事にうちそへて御涙のひる世なくおぼさるべし帥のみこの御事をあづまへ宣ひ遣したる相違なしとて九月十九日立太子の節會ありて坊に居給ひぬ今は世をとぢむる心地しつる人少し慰みぬべし

【一九九】院のうへさばかり和歌の道に御名たかくいみじくおはしませばいかばかりかと思されしかども正應に撰者どものことゆるゑに煩どもあり

て撰集も無かりしかばいとど口をしう思されて

わが世には集めぬ和歌のうら千鳥空しき名をやあとに残さむ
など詠ませおはしましたりしを今だにと急ぎたせたまひて爲兼の大納
言うけたまはりて萬葉よりこなたの歌ども集められき正和元年三月二十
八日奏せらる玉葉集とぞいふなる

【二〇〇】この爲兼の大納言は爲氏の大納言の弟に爲教右兵衛督といひし
が子なりかぎりなき院の御おぼえの人にてかく撰者にもさだまりにけり
そねむ人々多かりしかどさはらむやはこの院のうへ好みよませ給ふ御歌
のすがたは前藤大納言爲世の心地には變りてなむありける御手もいとめ
でたく昔の行成大納言にもまさり給へるなど時の人申しけりやさしうも
強うも書かせおはしましけるとかや

【二〇一】正和も二とせになりぬ今年御本意遂げなむと思さる九月の暮つ
かた賀茂に忍びて御籠の程をかしきさまの事ども侍りけり近く候ふ女房

どももうちしほたれつつつごもりがたの空のけしきいとものあはれなる
に御製

なが月や木の葉もいまだつれなきにしぐれぬ袖の色や變らむ
また

わが身こそあらずなるとも秋の暮をしむ心はいつもかはらじ
人々もさと時雨わたり袖の上今日をかぎりの秋の名残よりも忍びがたし
大納言爲子

ひとすちに暮れゆく秋を惜まばやあらぬ名残を思ひそへずて
又誰にか

いかにしたひいかに惜まむ年々の秋にはまさる秋のなごりを
十月十五日伏見殿へ御幸ありかぎりの旅と思せばえもいはず引きつくる
はる庇の御車なり上達部殿上人數しらす仕うまつり給ふ

【二〇二】世の政事なども新院にゆづり奉らせ給ひにしかば御心しづかに
のみ思されて伏見殿がちにのみぞおはしましし程にそこはかとなく御惱

月日經て文保元年九月三日かくれさせ給ひにき伏見院と申しき御母玄輝門院永福門院などの御歎思ひやるべし御門は御輕服の儀なれば天下も色變らずこの院姫君あまたおはしまししかど院號は章義門院延明門院ばかりにておはします二條富小路の昔の院のあとにあづまより造りて奉る内裏この頃御わたましありしなどいとおもしろかりき近き事は皆人々御覽せしかばなかなかにて止めつ

第十六 秋 の み 山

【二〇三】 文保二年二月二十六日御門おりゐさせ給ふ春宮は既に三十にみたせ給へば待遠なりつるにめでたく思さるべし法皇都に出でさせ給ひて世の中しろしめさる龜山殿はさる事にて近頃は太覺寺のほとりに御堂たてて籠りおはしましたつといよ密教の深き心ばへをのみ勤め學ばせ給へばおのづから京に出させ給ふ事なく又參りかよふ人も稀なるやうにて神さびたりつるを引きかへ事しげき世に行もげたいし給へばむづかし

く思さる

【二〇四】 三月二十九日御即位なり行幸の當日に左大將内經花山院右大將家定行列を争ひて隨身どもわわしくのしれば御輿をおさへて職事奏し下しなどすめり左大將の御父君は内實のおとどと聞えし嘉元の頃俄にかくれたまひにしかばせうろくもしあへ給はざりしにより今はただ人にてこそいますべければとてかく争ふとぞ聞えし

【二〇五】 十月二十七日大嘗會清暑堂の御神樂の拍子のために綾小路の宰相有時といふ人大内へ參り侍るとて車よりおるる程にいとすくよかなる田舎侍めくもの太刀を抜きて走り寄るままにあやなくうちてけりさばかり立ちこみたる人の中にいと珍らかにあさまして拍子俄にこと人承る大事どもはて後尋ね沙汰ある程にかい川の三位顯香といふ人のこの拍子をいどみて我こそつとむべけれと思ひければかかる事をせさせけり道にすける程はやさしけれどもいとむくつけしさてかの三位は流されぬ

【二〇六】かくて今年は暮れぬまことやこたみの春宮には後二條院の一の御子定まり給ひぬれば御門坊にておはしましし時のままに冷泉萬里小路殿の寢殿にうつり住ませ給へるに二月の頃軒の櫻さかりにをかしき夕ばえを御覽じて内に奉らせ給ふかの花につけて

なれにける花はこころやうつすらむ同じ軒端の春に逢へども御かへしは南殿の櫻にさしかへ給ふ

花はげに思ひ出づらむ春をへてあかぬ色香にそめしこころを

【二〇七】おりゐの御門は御兄の本院とひとつ持明院殿にすませ給ふもとより御子のよしにておはしませばまいて一つ院の内にていささかもへだてなく聞えさせ給ふいと思ふやうなる御ありさまなりさるべき御中といへども昔も今も御腹など變りぬるはいかにぞやそばしき事もうちまじりくせある習ひにこそあるをこの院の御あはひまめやかにおもほしかはしたるいとありがたうめでたし

【二〇八】本院は廣義門院の御腹の一の御子をこの度の坊にやと思されしかどひき過ぎぬればいと遙けかるべき世にこそとさうざうしく思さるべし御歌合のついでなりしにや

いろいろに都は春のときにあへどわが住む山は花もひらけず大覺寺院にはひきかへ馬車の立ちこみたるを御覽じて法皇よませ給ひける

われすめばさびしくもなし山里もあさまつりごと怠らずして

【二〇九】御門の御母女院十一月うせ給ひにしかば内のうへ御服奉る天下ひとつに染めわたして葦簾垂とかいとまがまがしきものども懸け渡したるも哀にいみじくぞ見ゆる五節もとまりぬ若き人々などさうざうしく思へり

【二一〇】當代もまた敷島の道をもてなさせ給へばいつしかと勅撰の事仰せらる前藤大納言爲世承る玉葉のねたかりしふしも今ぞ胸あきぬらむか

しこの大納言の女權大納言の君とて坊の御時かぎりなく思されたりし御腹に一の御子女三の御子法親王などあまたものし給ふかの大納言の君は早うかくれにしかばこの頃三位おくらせ給ふ贈従三位爲子とて集にもやさしき歌多く侍るべし

【二二一】 さて大納言は人々に歌すすめて玉津島の社に詣でられけり大臣上達部より始めて歌よむと思へるかぎりこの大納言の風を傳へたるは漏るるもなし子ども孫どもなど勢ことにひびきてくだるまづ住吉へ詣で逍遙しつつののしりて九月にぞ玉津島へまうでける歌どもの中に大納言爲世

今ぞしる昔にかへるわが道のまことを神もまもりけるとは

かくて元應二年四月十九日勅撰は奏せられけり續千載といふなり新後撰集とおなじ撰者の事なれば多くはかの集にかはらざるべし爲藤の中納言父よりはすこし思ふ所加へたる主にて今少しこの度は心にくきさまなりなどぞ時の人々沙汰しける

【二二二】 院にも内にも朝政のひまびまには御歌合のみしげう聞えし中に元亨元年八月十五夜かとよ常よりことに月おもしろかりしに上萩の戸に出でさせ給ひてことなる御遊などもあらまほしげなる夜なれど春日の御榊うつし殿におはします頃にて絲竹のしらべはをり悪しければ例の只内内御歌合あるべしとて侍従の中納言爲藤召されて俄に題奉る殿上に候ふかぎり左右同じ程の歌よみを擇らせ給ふ

【二二三】 衛士のたく火も月の名だてにやとて安福殿へ渡らせたまふ忠定中將晝の御座の御佩刀をとりて參る殿上のかみの戸を出でさせ給ひて無名門より右近の陣の前を過ぎさせ給へば遣水に月の映れるいとおもしろし安福殿の釣殿に床子たてて東面におはします上達部は簀子の高欄にせなかおしあてつつ殿上人は庭に候ひあへるもいと艶なり池の御船さしよせて左右の講師隆資爲冬乗せらる御みきなど參るさまもうるはしきことよりは艶になまめかし

【二二四】人々の歌いたくけしきばみてとみにも奉らずいと心もとなし照る月なみも曇なき池の鏡にいはねどしるき秋のなかばげにいとことなる空の氣色に月も傾きぬ明方近うなりにけりうへの御製

鐘の音も傾く月にかこたれて惜しと思ふ夜はこよひなりけりと講じあげたるほど景陽の鐘も響を添へたる折柄いみじうなむいづれもけしうはあらぬ歌ども多く聞えしかど御製の鐘の音にまされるは無かりしにや

【二二五】かくて今年もまた暮れぬ明くる春正月三日朝覲の行幸あり法皇は御弟の式部卿のみこの御家大炊御門京極といふにぞおはします内裏は二條萬里小路なれば陣の中にて大臣以下かちより仕うまつらるこの院も池のすまひ山の木立もとよりよしあるさまなるに時ならぬ花の梢をさへつくり添へられたれば春の盛に變らず咲きこぼれたるに雪さへいみじく降りて残る常磐木もなし洲崎にたてる鶴のけしきも千代をこめたる霞の洞は誠に仙人の宮もかくやと見えたり

【二二六】法皇はややもすれば大覺寺殿にのみ籠らせおはします人々世の中のことども奏しに參りつどふ今は一すぢに御行にのみ御心入れ給へるにいとうるさく思せばその夏の頃定房の大納言あづまへ遣さる御門に天の下のことゆづり申さむの御消息なるべし大方はいとあさましうなりはてたる世にこそあめればかりの事は父御門の御心にいとやすく任せぬべきものをとめざましかれど昨日今日始りたるにもあらず承久よりこなたは斯くのみなりもて來にければなめり内に近く候ふ上達部などのなま腹ぎたなきわが思ふ事の滞りなどするなほ法皇をうれはしげに思ひ奉りてこの事いかで東よりゆるし申すわがなと祈りなどをさへぞしけるかくて大納言程なく歸りのぼりぬ御心のままなるべく奏したりとて院の文殿議定所にうつされ評定衆などせうせうかはるもありさて世をしたためさせ給ふ事いとかしこう明らかにおはしませば昔に恥ぢずいとめでたし御才もいとはしたなうものしたまへば萬の事くもりなかめり三史五經の御論議などもひまなし

【二二七】みな月の頃中殿の作文せさせたまふ題は式部大輔藤範奉る久しかるべきは賢人の徳とかや聞えしにや女のまねぶべき事ならねば漏しつ上達部殿上人三十餘人まるれり關白殿ばかり直衣にて御几帳のうしろに候はせ給ふうへは御引直衣御琵琶ひかせ給ふうへの御琵琶の音いひ知らずめでたし

【二二八】御遊はててのち文臺めさる藏人内記俊基人々の文をとりあつめて一度に文臺の上に置く披講の終る程に短夜もほのぼのと明けはてぬ御製を左の大臣かへすがへす誦じてうるはしく朗詠にせらる聲いと美しく折ふし郭公の一聲なのりすてて過ぎたるはいみじくえむなりかやうのまことしき事はかねて人々も心づかひすれば過なかるべし時に臨みて俄にかたき題をたまはせて内々詩をつくらせ歌をよませてかしくおろかなると御覽じわくにいとからい事おほく心ゆるびなき世なり

【二二九】その七月七日乞巧奠いつの年よりも御心とどめてかねてより人

人に歌ども召され物の音どもも試みさせ給ふその夜は例の玄象ひかせたまふ人々の所作ありし作文にかはらず笛筆築などは殿上人どもなる板のほどに候ひて仕うまつる中宮も上の御局にまう上らせたまふ御簾の内にも琴琵琶あまたありき播磨の守永定の女今は左大臣の北方にて三位殿といふも箏弾かれけり宮の御方の播磨の内侍もおなじく琴弾きけるとかや琵琶は權大納言の三位殿いみじき上手におはすればめでたうおもしろし蘇香萬秋樂のこる手なく幾返となくつくされたり明けがたは身にしむばかり若き人々めであへりさらでだに秋の初風はげにそぞろ寒きならひをことわりにや

【二三〇】御遊はてて文臺召さるこの度は和歌の披講なればその道の人々藤大納言爲世子ども孫ども引きつれてさぶらへばうへの御製
笛竹のこゑも雲ゐに聞ゆらしこよひたむくる秋のしらべは
すむながるめりしかどいづれも只天の川かささぎの橋より外はめづらし
きふしは聞えずまことや實教の大納言なりしにや

おなじくは空までおくれ薫物のにはひをさそふ庭の秋かせ
げにえならぬ名香の香どもぞめでたくかうばしかりし

第十七 春のわかれ

【二二二】 四月の末つ方より法皇御惱重くならせ給へば天下の騒ぎ思ひや
るべし御門もいみじく思し歎き御修法どもいとちたくまたまた始め加
へさせ給へどしるしなくて日々に重らせ給へば夜晝となくいかにいかに
ととぶらひ奉らせ給ふ若き上達部などは直衣に柏夾して夜中曉となく遙
けき嵯峨野を寮の御馬にて馳せありきたまふめり今はむげに頼みなきよ
し聞ゆれば大覺寺殿へ行幸ありし事思し出づ萬の事ども聞えさせ給ふ上
の一つ御腹の二品法親王性圓と聞ゆるをいとかなしきものに思ひ聞えさ
せ給ひてこの大覺寺にそこの御莊御牧など寄せたまふ法のあるじとし
ておはしますべく思しおきてけりさやうの事など見給へざらむあと後め
たからぬさまなどぞ聞えさせ給ひける

【二二三】 その後御孫の春宮行啓あり世を知しめさむ時の御心づかひなど
今すこしこまやかに聞えしらせ給ふ宮は先帝の御かはりにもいかで心の
かぎり仕う奉らむとあらましおぼされつるにあかず口惜うていたうしほ
たれさせたまふ御門の御なからひうはべはいとよけれどまめやかなら
ぬをいと心苦しと思さるれどことに出で給ふべきならねば只大かたにつ
けて世にあるべき事ども又この頃すこし世にうらみあるやうなる人々の
我が御心には哀と思さるるなど數多あるをぞ御心のままなる世にもなり
なむ時は必ず御用意あるべくなど聞え給ひけり中御門の大納言經繼六條
の中納言有忠右衛門督教定左衛門佐俊顯など聞えし人々のことにやあり
けむ

【二二四】 さてその夜はとまり給へるもしろしめさで夜うち更けて少し驚
かせ給ひて春宮はいつかへり給ひぬるぞと宣ふにうち聲じくりて近く參
り給へればいまだおはしましけるなとていとらうたしと思されたる御氣
色あはれなり大方のけしき院の内のかいしめりたるありさまなどよろづ

思しめぐらすにいと悲しき事多かれば宮うち泣き給ひぬ心細ういみじとのみ思さるるに正中元年六月二十五日終にかくれさせ給ひぬ御年五十八にぞならせ給ひける後宇多院と申すなるべし御門又御服たてまつるあけくれねむごろにけうじ奉り給ふさまいとかたじけなし御女の皇后宮ときこえし今は達智門院と申すもまいて一所をのみ頼み聞えさせ給へるに心細ういみじと思し歎く事かぎりなし

【二二四】 あはれあはれと言ひつつも過ぎやすき月日のみうつりかはりて年もかへりぬ一昨年ばかりより又重ねて撰集の事仰せられしを爲世の大納言二度にりぬればにや爲藤の中納言に譲りしを幾程なくかの中納言惱みてうせぬいとほしう哀なり故爲道朝臣のうせにし只年月ふれど絶えぬうらみなるに又かくとり重ねたる歎き大納言の心の中いはむかたなし春宮よりしばしばとぶらはせ給ふ御消息のついでに

おくれゐる鶴の心もいかばかりさきだつ和歌のうらみなるらむ御かへし大納言爲世

思へただ和歌の浦にはおくれゐて老いたるたづの歎くところを世に歌よむと思しき人の哀がり歎かぬはなしせめて勅撰の事撰びはつるまでなどかはとぞひとぞうの歎きいとほしげなり

【二二五】 故爲道の中將の二郎爲定といふを故中納言とりわき子にして何事もいひつけしかば撰歌の事もうけつぎて沙汰すべきなどぞ聞ゆる大納言は末の子爲冬の少將といふをいたくらうたがりてこのまぎれに引きや越さましと思へる氣色ありとて爲定もうらみ歎きて山伏すがたに出で立ちて修行に出でうせぬるなどいひさたすれば入々いとほしう哀れになどもてあつかへどさすが求めいだしてもとのやうにおだしく定まりぬとなむ

【二二六】 そのころなが月ばかりまだしのめの程に世の中いみじく騒ぎののしるなに事にかと聞けば美濃國の兵にて土岐の十郎とかやまた多治見の藏人などいふものども忍びのぼりて四條わたりに立ちやどりたる事

ありて人に隠れて居りけるを早う又告げ知らずるものありければ俄にその所へ六波羅よりおし寄せて搦めとるなりけりあらはれぬとや思ひけむ彼のものどもはやがて腹切りつ又別當資朝藏人内記俊基同じやうに武家へとられてきびしく尋ね問ひまもりさわぐ事の起りは御門世をみだり給はむとてかの武士どもを召したるなりとぞいひあつかふめるさてその宣旨なしたる人々とてこの二人をも東へ下していましむべしとぞ聞ゆるいかさまなることの出で來べきにかといと恐ろしくむづかし

【二三七】 故院おはしましし程は世ものどかにめでたかりしをいつしかかやうのことも出で來ぬるよと人の口やすからざるべし正應にも淺原といひしさわぎは後嵯峨院の御處分を東よりひき違へし御恨とこそは聞えしか今もその御憤の名殘なるべし過ぎにし頃資朝も山伏のまねびして柿の衣に綾蘭笠といふもの着てあづまの方へ忍びて下れりしは少しはあやしかりし事なり早うかかる事どもにつけてあなたさまにも宣旨を受くるものありけるなめり俊基も紀伊國へゆあみに下るなどいひなして田舎あ

りきしたりしも今ぞ皆人思ひ合はせける

【二三八】 さるままにはいひ知らず聞ゆる事どもあればまだきにいと口をしう思されてこのことを先おだしく止めむとおぼせばかの正應にありしやうなる誓の御消息を遣はす宣房の中納言御使にてあづまへ下る大かたふるき御世より仕へ來て年もたけたるうへこの頃は天下にいさぎよくうべうべしき人に思はれたる頃なればこの事更に御門の知しめさぬよしなどけざやかにいひなすに荒きえびすどもの心にもいと忝き事となごみてぶいなるべく奏しけり

【二三九】 この御使の賞にや宣房大納言になされぬいといみじき幸なり親は三位ばかりにて入道してき子どもなどさへいと清げにてあまたあめりさればおほやけは知しめされぬにてもかの人々は遁るべきかたなしとて別當は佐渡の國へ流されぬ俊基はいかにして遁れぬるにか都へ還りぬれどありしやうには出でつかへず籠り居たるよしなりかやうにて事なく鎮

まりぬればいとめでたけれどうへの御心の中は猶安からずいかならむ時とのみおもほしわたるべし

【二三〇】 月日程なく遷り行きて嘉暦元年になりぬ三月の始つ方より春宮例ならずおはしまして日々に重らせ給ふさまさまの御修法どもはじめ御祈なにやかやと伊勢にも御使奉らせ給へどかひなくて三月二十日遂にいとあさましくならせたまひぬ宮の内火をけちたる心地して惑ひあへり御乳母の對の君といふ人夜晝御傍去らず候ひなれたるにいみじき心まどひ誠にをさめ難げなりかぎり見え給ふ御顔にさしよりてかく残りなき身を御覽じ棄ててはえおはしましやらじ今一度御聲なりとも聞かさせ給ひていづ方へも御供にゐておはしましてよと聲も惜まず泣き入り給へるさまいと哀なりすべて宮の内とよみ悲ぶさまいはむ方なし

【三三一】 さてあるべきならねば常の行啓のさまにて先帝のおはしましし北白川殿へぞ入れ奉らせ給ひぬる土用の程にてしばし彼處におはします

さへいと悲し院號などの沙汰もあるべくこそされどおはしましし時にその事はよしなかるべく仰せられ置きしかば内よりも聞し召し過しけり晝の御座のよそひとりこぼち火たき屋などかき拂ふほど猶うつつとも覺えず堀川の女御の見えしおもひのなど宣ひけむはこの世ながら御心との御あかれなれば羨ましくさへ覺ゆさしあたりての哀はさし置きて先帝の御位ながらうせ給へりしだにあるを又かくなかばなるやうにてあさましければ世の人の思ふらむ事も心うく一方ならぬ歎に添へたるうれへいはむ方なし大方我が身をかぎりはてぬると思ふ人のみ多かりき

【三三二】 有忠の中納言先坊の御使にて東に下りにしいつしかと思ふさまならむ事をのみ待ち聞えつつ踐祚の御使の都に參らむと同じやうに上らむとていまだ彼處にもものせられつるにかくあやなき事の出で來ぬればいみじともさらなり三月三十日やがてかしこにて頭おろす心の中さこそはと悲し

おほかたの春の別れの外にまた我が世つきぬる今日の暮かな

【二三三】 都にも前の大納言經繼四條三位隆久山井の少將敦季五辻の少將ながとし公風の少將左衛門佐俊顯など皆かしらおろしぬ女房には御息所の御方對の君帥の君兵衛督内侍の君などすべて男女三十餘人さまかはりてけりやむごとなき君の御時もかくばかりの事はいとあり難きを佛などの現れ給ひて殊更に迷ひ深き衆生を導き給ふかとまで見えたり御本性のいとなごやかにおはしまししかば近う仕うまつるかざりの人は年比の御名残を思ふもいと忍び難きうへ大かたの世にもさしはなたれて身をやうなきものに思ひ棄つるたぐひなどさまさまにつけて厭ひ背くなるべし

【二三四】 まことや例のさきに聞ゆべき事を時たがへ侍りにけり兵衛督爲定故中納言のあとうけて撰びつる撰集の事正中二年十二月の頃まづ四季を奏するよし聞えし残りこの程世にひろまれるいとおもしろし御門ことの外にめでさせ給ひて續後拾遺とぞいふなる中宮大夫師賢うけたまはりてこの度の集のいみじきよしさまさま仰せ遣したるに御かへしに爲定今ぞ知る拾ひし玉の數かずに身を照らすべきひかりありとは

御かへし内の御製

かずかずに集むる玉のくもらねばこれもわが世の光とぞなる
この大夫はもとより中よきどちにて常に消息など遣はすにかく世にほめ
らるるをいとよしと思ひて兵衛督のもとへいひやる

和歌の浦の波も昔にかへりぬと人よりさきに聞くぞうれしき
かへし
和歌の浦や昔にかへる浪ぞとも通ふこころにまづぞ聞くらむ

【二三五】 八月になりて陽徳門院の土御門東の洞院殿へ行啓はじめあり先坊の宮は鷹司なれば間近き程に世のおとなひ聞しめす入道の宮女院などの御心のうち今さらになしかなし本院新院ひとつ御車に奉りてさきだちて入らせたまふ行啓は東の洞院おもての棟門に御車とどめて中門まで筵道を敷きて歩み入らせ給ふ御びむづら結ひていとさびはに美しくしげなり十四ばかりにやおはしますらむ宮づかさども院の殿上人など多く仕うまつれり花開けたる心地どもすべし哀なる世のならひなりかし

【二三六】かくて今年も暮れぬれば嘉暦も二年になりぬ一の宮御かうぶりし給ひて中務卿尊良親王ときこゆ去年より内に御とのゐ所して渡らせ給ふ正月の十六日の節會にめづらしく出で給ふ御門も徳治の頃帥にて七日の節に出でさせ給へりし例思し出づるにや大方ふるくは皆さこそありけれど近頃はいたくかやうには無かりつるを御子たち御冠の後はいづれも昔おぼえてさるべきをりをり出で仕へさせ給ふめり

【二三七】二月になればやうやう故宮の御一めぐりの事ども永嘉門院には營ませ給ふも哀つきせず鷹司の大殿もうせ給ひぬこの頃の世にはいと重くやむごとなくものし給へるにいとあたらし北政所は中院の内の大臣通重の御はらからなりそれもさまかはり給ひぬ近頃よき人々多くうせ給ひぬるこそいとくちをしけれ

第十八 むら時雨

【二三八】竹の園生は茂けれど秋の宮の御腹には只一品内親王ばかりものし給ふをいとあかず思ほしわたるにこの頃珍らしき御惱のよし聞ゆればいとめでたくあらまほしき御事なるべきにやと上もいみじくおぼされてかねてより御修法どもこちたく始めらるましてその程近くならせ給ひぬれば式部卿の宮の常磐井殿へ出でさせたまひてうへも二三日へだてず通ひおはします陣の内なれば上達部殿上人夜晝となく袴のそばとりて参りちがふ御兄の兼季の大臣も絶えず候ひたまふいみじき世のさわぎなり故入道殿今しばしおはせましかばとおぼしいづる人々多かり山三井寺山科寺仁和寺すべて大法祕法祭はらへ數をつくしてののしるさまいとたのもし

【二三九】かくて元徳元年にもなりぬ今年はいかなるにかしはぶきやみはやりて人多くうせ給ふ中に伏見院の御母玄耀門院前坊の御母代の永嘉門院近衛大北政所などやむごとなきかぎりうち續きかくれたまひぬればここかしこに御法事しげくていと哀なり

【二四〇】かやうの事どもにて今年もまた暮れぬ明くる春の頃内には中殿にて和歌の披講あり序は源大納言親房かかれけりかねてよりいみじうかかせ給へば人々心づかひすべし題は花契萬春とぞ聞えし御製

とき知らず花も常磐の色に咲けわがここのへはよろづ代の春
中務卿尊良親王

のどかなる雲ゐの花の色にこそよろづ代經べき春は見えけれ
帥御子世良

ももしきの御垣の櫻咲きにけりよろづ代までの春のかざしに
つぎつぎおほかれどもむづかし

【二四一】三月の頃春日の社に行幸し給ふ例のいみじき見物なれば棧敷どもえもいはずいどみつくしたりその後日吉の社にも参らせたまひき今年も人多く俄やみして死ぬる中に帥の御子重くなやませ給ひていとあへなくうせ給ひぬ内のうへおぼし歎く事おろかならず一の御子よりも御才などもいとかしこくよろづきやうさくに物し給へれば今より記録所へも御

供に出でさせ給ふ議定などいふ事にも参り給ふべしと聞えつるにいとあさまし御めのとの源大納言親房わが世盡きぬる心地してとりあへず頭おろしぬこの人のかく世を捨てぬるを親王の御事にうち添へてかたがたいみじく御門も口惜くおぼし歎く世にもいとあたらしく惜みあへり

【二四二】又の年の春三月のはじめつかた花御覽じに北山に行幸なる常よりも殊におもしろかるべい度なればかの殿にも心づかひし給ふまづ中宮行啓またの日行幸前の右の大臣兼季まゐりたまひて樂所のことなどおきてのたまふ康保の花の宴のためしなど聞えしにや北殿の棧敷にてうちうち試樂めきて家房朝臣舞はせらる御簾の内に大納言二位殿播磨内侍など琴かき合せていとおもしろし

【二四三】又の日は無量光院の前の花の木蔭に上達部立ち續き給ふ廂に倚子たててうへはおはします御遊はじまる拍子に治部卿まるるうへも櫻人うたはせ給ふ御聲いと若く花やかにめでたし去年の秋の頃かとよ資親の

中納言にこの曲はうけさせ給ひて賞に正二位ゆるさせ給ひしも今日のた
めにやありけむといとえむなり物の音どもとのほりていみじうめでた
しその後歌どもめさる花を結びて文臺にせられたるは保安のためしとぞ
いふめりし

【二四四】その夏の頃御門例ならずおはしまして御薬の事など聞ゆいと重
くのみならせ給ふとて世の中あわてたるさまなり時しもあれやかの一年
とられたりし俊基を又いかに聞ゆる事の出で來たるにか搦めとらむとし
ければ内へ逃げて參るをおひ騒ぎて陣のほとりまで武士どもうち込みの
のしればこは何事と聞きわくまでもなしいともの騒がしく肝つぶれてあ
るかぎり惑ひあへりうへも物覚え給はぬ御ありさまにて大殿ごもれるに
かかるよし奏すればいみじう思さる遂に又の日六波羅へ遣したればあづ
まへゐて下りぬ上は御惱おこたらせ給ひていとど安からず思す事まされ
り日比も御心にかけてさせ給へる事なれば速かにこのあらまし遂げてむと
ひたぶるに思し立ちて忍びてここかしこにその用意すべし

【二四五】后宮の御腹の一品内親王御占にあはせたまひて去年の冬頃より
御きよまはりありつる今日明日齋宮に居給ふ八月二十日まづ河原へ出で
させ給ひてやがて野の宮に入らせたまふその程の事どもいみじう清らな
りこの御いそぎ過ぎぬればまづ六波羅を御かうじあるべしとてかねてよ
り宣旨にしたがへりしつはものどもをしのびて召す源中納言具行とりも
ちて事行ひけり

【二四六】山の前座主にて今は大塔の二品法親王尊雲と聞ゆるいかでなら
はせ給ひけるにか弓ひく道にもたけく大かた御本性はやりかにおはして
この事をもおなじ御心におきてのたまふ又中務の親王のひとつ御腹に妙
法院の法親王尊澄と聞ゆるは今の座主にてものし給へばかたがた比叡の
山の衆徒も御門の御軍に加はるべきよし奏しけり

【二四七】つつむとすれど事廣くなりなければ武家にも早う漏れ聞えてさ
にこそあなれと用意すまづ九重をきびしくかため申すべしなど定めけり

かくいふは元弘元年八月二十四日なり雑務の日なれば記録所におはしまして人の争ひうれふる事どもを行ひ暮させ給ひて人々もまかで君も本殿にしばしうち休ませ給へるに今宵既に武士どもきほひ参るべしと忍びて奏する人ありければとりあへず雲の上を出させ給ふ中宮の御方へ渡らせ給ひてもしめやかにあらずいとあわただしかねて思しまうけぬにはあらねども事のさかさまなるやうになりぬればよろづうきうきと我も人もあきれ居たり内侍所神璽寶劔ばかりをぞ忍びてゐて渡らせ給ふ上はなよらかなる御直衣たてまつり北の對よりやつれたる女車のさまにて忍び出でさせ給ふかの二條院の昔もかくやと思ひ出でらる

【二四八】 日比の御本意にはまづ六波羅を攻められむまぎれに山へ行幸ありて彼處へつはものどもを召して山の衆徒をも相具し君の御かためとせらるべしと定められければかの法親王たちもその御心して坂本に待ち聞え給ひけれど今はかやうに事違ひぬればあへなしとて俄に道をかへて奈良の京へぞ赴かせ給ふ中務の宮も御馬にて追ひて参りたまふ九條わたり

まで御車にてそれより御門もかりの御衣にやつれさせ給ひて御馬にたてまつるほどこはいかにしつる事ぞと夢の心地して思さる御供に按察大納言公俊萬里小路中納言藤房源中納言具行四條中納言隆資など参れりいづれもあやしき姿にまぎらはして暗き道をたどりおはする程げに闇のうつつの心地して我にもあらぬさまなり

【二四九】 丑三つばかりに木幡山過ぎさせ給ふいとむくつけし木津といふわたりに御馬とめて東南院の僧正の許へ御消息つかはすそれより御輿を参らせたるに奉りて奈良へおはしまし着きぬここに中一日ありて廿七日和東の鷲峯山へ行幸ありけれどもそこもさるべくやなかりけむ笠置寺といふ山寺へ入らせ給ひぬ所のさまたやすく人の通ひぬべきやうもなくよろしかるべしとて木丸殿のかまへを始めらるこれよりぞ人々すこし心地とりしづめて近き國々の兵ども召しに遣はす

【二五〇】 さて都には二十四日の夜六波羅より常陸守時知馳せ参りて百敷

の中をあさりさわぐその程人の曹司などにおのづから落ち残りたる女房の心地いはむかたなしおはします殿を見れば近き御厨子御調度どもなにくれ硯などもさながらうち散りて只今までおはしましたしける跡と見えながら宮人などだに一人もなし女房の曹司曹司よりひすましめく女の童など我先にと走り出で調度ども運び騒ぎくづれ出づる氣色どもいとあさましく目もあやなり

【二五二】 錦の几帳の内につかれましたしつる後の宮も何の儀式もなく忍びてあわて出でさせ給ひぬればあたりかき拂ひ時の間にいとあさましく御簾几帳など踏みしだきひき落して火の影もせず此處も彼處も暗がりてうちあれたる心地す今朝まで九重の深き宮の中に入りつかへつる男女ひとり留らずえもいはぬ武士ともうち散り荒々しげなるけはひに續松高くささげて細殿渡殿何くれまかげさしてあさりたる氣色けうとくあさまし世は憂きものにこそと時の間にげに心あらむ人はやがて修行の門出にもなりぬべくぞ覺えぬる中宮は忍びて野宮殿の傍にぞおはしま

し着きにける宣房の大納言の二郎季房の宰相ばかり御宿直に侍ふ

【二五三】 二十五日の曙に武士どもみちみちて御門の親しく召し使ひし人の家々へ押し入り押し入りともて行くさま獄卒とかやの現れたるかといと恐ろし萬里小路大納言宣房侍従中納言公明別當實世平宰相成輔一度に皆六波羅へゐて行きぬかやうの事を見るにとど肝心も失せておのづからとり残されたる人も心と皆かきけち行き隠るる程に主なき宿のみぞ多かる

【二五三】 坂本には行幸を待ち聞え給ひけるに引きたがへ南ざまへおはしましぬればそのよし衆徒に聞かれなば悪しかりぬべし又とまれかくまれまことのおはしまし所をさうなく武家へ知らせじの謀にやありけむ花山院の大納言師賢を山へ遣はして忍びて御門のおはしますよしにもてないてかの兩法親王事行ひたまひつつ六波羅のつはものどものかこみを防がせたまふ

【二五四】その日は大納言も大塔の前座主の宮もうるはしき武士姿にいでたたせ給ふ卯花をどしの鎧に鍬形の兜たてまつり大矢負ひてぞおはする妙法院の宮はすすしの御衣の下に萌黄の御腹巻とかや着たまへり大納言はからの香染の薄物の狩衣にけちえむに赤き腹巻をすかしてさすがに蒔繪の細太刀をぞ佩き給ひける

【二五五】六波羅より御門ここにおはしますと心得て武士ども多く参りかこむ山法師も戦ひなどして海東とかやいふつはもの討たれにけり事のはじめに東うせぬるめでたしなどぞいふめるかかれども御門笠置におはしますよし程なく聞えぬれば謀られ奉りにけるとて山の衆徒もせうせう心がはりしぬ宮々も逃げ出で給ひて笠置へぞまうで給ひける

【二五六】大納言は都へまぎれおはすとて夜ぶかく志賀の浦を過ぎ給ふに有明の月くまなく澄み渡りて寄せかへる浪の音もさびしきに松吹く風の身にしみたるさへとりあつめ心細し

思ふことなくてぞ見ましほのぼのと有明の月の志賀のうら波
その後辛うじてぞ笠置へはたどり参られける

【二五七】かやうの事どもも例のはや馬にてあづまへ告げやりぬ只今の將軍は昔式部卿久明親王とて下り給へりし將軍の御子なり守邦の親王とぞ聞ゆる相模守高時といふは病によりていまだ若けれど一とせ入道して今は世の大事どもいろはねど鎌倉のぬしにてはあめり心ばへなどもいかにぞやうつつなくて朝夕好むこととは犬くひ田樂などをぞ愛しけるこれは最勝園寺入道貞時といひしが子なれば承久の義時より八代にあたりこの頃私の後見には長崎入道圓基とかやいふものあり世の中の大小事只この圓基が心のままなれば都の大事かばかりになりぬるをもかの入道のみぞとりもちておきて計ひける重き武士ども多くのぼすべしと聞ゆ大かた京も鎌倉も騒ぎののしるさまけしからず承久の昔もかくやと今更に思ひやらる

【二五八】持明院殿には春宮おはしませば思の外にめでたかるべき事なれど今日明日はいまだ軍のまぎれにて何の沙汰もなし御宿直の者のうべうべしきも無くて離れおはしますもあぶなき心地すればにやせめても六波羅近くとて六條殿へ本院新院春宮引き續きて遷らせたまひぬれど日にそへて天の下さわぎみち恐しき事のみ聞ゆれば猶これも危しとて六波羅の北に代々の將軍の御料とて造り置ける檜皮屋一つあるに兩院春宮いらせ給ふ大方はいともしきやうなれどよろしき時こそあれかばかりのきには何の儀式も無かるべし

【二五九】笠置殿には大和河内伊賀伊勢などより兵ども参りつどふ中に事のはじめより頼み思されたりし楠木兵衛正成といふものあり心猛くすくよかなるものにて河内國に己が館のあたりを厳しくしたためてこのおはします所若し危からむ折は行幸をもなし聞えむなど用意しけり東のえびすどももやうやう攻め上るよし聞ゆもとより京にある武士どもも我先にときほひ参る

【二六〇】木丸殿にはさこそいへむねむねしきものなしいかになり行くべきにかといとも心細く思しみだる我が御心もての御事なればかこつかたなければ故郷の空もあはれに思し出でらる秋も深くなり行くままに山の木の葉のうちしぐれ谷の嵐のおとづるもあたのきほふかと肝を消す御住居いつしか御身をかへたる心地し給ふもあぢきなし
うかりける身を秋風にさそはれて思はぬ山のみちをぞ見る

【二六一】既に東の武士ども雲霞の勢をたなびかし上るよし聞ゆれば笠置にもいみじう思し騒ぐもとよりいと嶮しき山のつづらをりをえもいはず木戸逆茂木石弓などいふ事どもしたためらるさりとまたやすくは破れじと頼ませ給へるに後の山より御かたきどもくづれ参りて木戸ども焼き拂ひおはしますあたり近く既に煙もかかりければ今はいかがせむにてあやしき御姿にやつれて辿り出でさせ給ふ座主の法親王御手をひき奉り給へるもいとほかなげなる御有様なり

【二六二】中務の御子大塔の宮などはかねてよりここを出でさせ給ひて楠木が館におはしましけり行幸もそなたさまにやと思し心ざして藤房具行兩中納言師賢の大納言入道手を取りかはして焰の中を免れ出づる程の心地ども夢とだに思ひも分かずいとあさまし少し延びさせ給ひてぞ御馬尋ね出でて君ばかり奉りぬれどならはぬ山路に御心地もそこなはれて誠にあやふく見えさせ給へばたかまの山といふわたりにしはし御心地をためらふ所に山城國の民にて深須の五郎入道とかいふもの参りかかりて案内聞えたるしもいとめざましう口惜し上達部思ひやる方なくて只目を見かはしていかさまにせむとあきれたるに東より上れる大將軍にて陸奥國の守貞直といふもの大勢にて参れり今はただともかくものたまはずべきやう無ければ遂にかひなくて敵のために御身を任せぬるさまなり

【二六三】やがて宇治に行幸あるべきよし奏すれば御心にもあらでひかされおはします程に心憂しといふものめなり具行藤房忠顯少將などやがておのが手の者どもに隨へさせつ大納言入道御馬のしりに走り後れて此

處彼處の岩蔭木のもとに休みつつとかくためらふ程にそれも見つけられととられぬ君をば宇治へ入れ奉りてまづ事のよし六波羅へきこゆる程一二日御逗留ありかくいふは九月三十日なれば空のけしきさへ時雨がちに涙もよほしがほなり平等院の紅葉御覽じやらるるもかからぬ行幸ならばとあへなし後冷泉院かとよここに行幸し給ひて三四日おはしましけるその世の人の心地上下何事かはと羨しくあはれに思さる

【二六四】十月三日都へ入らせ給ふも思ひしにかはりていとすさまじげなる武士ども衛府のすけの心地して御輿近くうち圍みたり鳳輦にはあらぬ網代輿のあやしきにぞたてまつれる六波羅の北なる檜皮屋にはもとより兩院春宮おはしませば南の板屋のいとあやしきに御しつらひなどしておはしまさするもいとほしうかたじけなし間近きほどによるづ聞しめし御覽じふるる事々につけてもいかでか御心動かぬやうはあらむ口惜しう思しみだるならはぬ御やどりに時雨の音さへはしたなくて

まだなれぬ板屋の軒のむら時雨おとを聞くにも濡るる袖かな

【二六五】春宮は世をつつしみて六波羅に渡らせ給ふ先帝はあたのため
同じ御やどり葦垣ばかりを隔てにておはしませば主なき院の内いとさび
しくて衛士のたく火も影だに見えず内にはいつしかけしかるものなど住
みつきて或時は紅の袴長やかに踏み垂れて火ともしたる女見るままに丈
は軒とひとしくなりて後にはかき消ち失するもあり又いみじう光を放ち
て髪を前に亂しかけたる童なども見えけり鬼殿などはかくや有りけむと
おそろし人住まで年経あれぬる所などにこそかかる事もおのづからあり
けれ僅に一月二月の中にかかるべきにはあらぬをこれかれいと怪しきわ
ざなるべし

【二六六】さて例のあづまより御使上れり代々のためしとかやとて秋田の
城の介高景二階堂出羽の入道雲とかやいふものぞ参れる西園寺大納言
公宗卿に事のよし申して春宮御位につきたまふさるべき御事といひなが
ら今日明日とは見えざりつるにいとめでたしさて六波羅よりこの度は世
の常の行啓の儀式にて持明院殿へ入らせ給ふ兩院もひきつくるひたる御

幸のよしなりひしめきたちぬる世の音なひを聞しめす先帝の御心地たと
しへなくねたく人わろしもの内裏へ新帝うつらせ給ふ上達部残りなく
仕う奉らる院も常磐井殿へおはしまいて世の政事聞しめせば後宇多院の
昔思ひ出でられてあはれなり

【二六七】いつしか十月十二日綸旨下されて前の御代の人々大中納言宰相
すべて十人宣房公明藤房具行隆資實世實治季房隆重忠顯司やめらるるよ
し聞ゆるも昨日までの時の花と見えし人々つかの間の夢かとおはれなり
かかるにつけては一つ御ぞうのみ今はわく方なく定り給ふべきかと世の
人も思ひ聞ゆる程に龜山院の御流絶ゆべきにはあらずとにや先坊の一の
宮を太子に立てまつる御乳母の雅藤の宰相の法勝寺の家に渡らせ給へる
を土御門高倉の先坊の御跡へ入れ奉りて十一月八日坊に定まり給ふ今は
思ひ絶えぬる心地しつるにいとめでたし

【二六八】松が浦島に年経給ひぬる入道の宮も御親の心地にておはします

べければ太上天皇になすらへて崇明門院ときこゆよろづ斧の柄の朽ちに
し昔を改めたる宮のうちなりありし後おのがさまままかで散りにし古
女房上達部殿上人など世の中くむじいたくて此處彼處に籠り居たりしも
いつしかと参りつどふさま谷の鶯の春待ちつけたる心地していと頼もし
げなり傳には久我の右の大臣長通大夫には中院大納言通顯なり給ふなべ
て世に年比うづもれたりし人々いつしか司位さまさまに思ふままなる氣
色ども目の前にうつりかはる世の有様今さらならねどいとしるくけちえ
むなるもあぢきなしかくて年も暮れぬ

第十九 久米のさら山

【二六九】元弘二年の春にもなりぬ新しき御代の年のはじめには思ひなし
さへ花やかなり上も若う清らにおはしませばよろづめでたく百敷の内何
事も變らずさるべき公事のをりをりさらでも院内同じ陣の中なれば一つ
に立ちこみたる馬車隙なくにぎはしけれど見し世の人は一人もまじろは

ず参りまかづる顔のみぞかはれる

【二七〇】先帝はいまだ六波羅におはします二月の頃空の氣色のどやかに
かすみわたりてゆるらかに吹く春風に軒の梅なつかしくかをり來て鶯の
聲うららかなるもうれはしき御心地にはものうかる音にのみ聞し召しな
さることやうなれどかの上陽人の宮の中思ひよそへらるながき日影もい
とど暮し難き御なぐさめにとや聞え給ひけむ中宮より御琵琶奉らせ給ふ
ついでにいささかなる物のはしに

思ひやれちりのみつもる四の絃にはらひもあへずかかる涙を
げにと思召しやるにいと悲しくて玉水の流るるやうになむ御かへし
かきたてし音をたちはてて君戀ふる涙の玉の緒とぞなりける

【二七一】かの承久のためしにとや東よりの御使には長井の右馬助高冬と
いふものなるべしこれは頼朝の大將の時より鎌倉におもき武士にていま
だ若けれどもかかる大事にも上せけるとぞ申しける遂に隱岐國へ遷し奉

るべしとて三月のはじめの七日に都を出でさせたまふ今はと聞しめす御心まどひどもいへばさらなり所々の歎き近う仕りし人々の心地どもおき所なく悲し

【二七二】 御門も限りなく御心惱むべしいとかうしも人に見えじとかつは思ししづむれどあやにくにすすみ出づる御涙をもてかくしつおはしますふりにし事を思し出づるにも立ちかへりまた世をやすく思さむ事のいとかたければよろづ今をとちめにこそと思しめぐらすに人やりならず口惜しきちぎり加はりける前の世のみぞつきせず恨めしき

つひにかく沈みはつべき報あらば上なき身とはなに生れけむ

【二七三】 巳の時ばかりに出でさせ給ふ網代の御車に御前どもなどは故院の御世より仕う奉りなれにし者どもある限り参れり御車寄に西園寺中納言公重さぶらひ給ふうへは御冠に世のつねの御直衣指貫白綾の御衣一かさね奉れり去年の今日は北山にて花の宴させ給ひしもあはれに思し出

でられてその日の事かきつらね戀しくおぼさる人々の祿にこそは賜はせしを今日は御旅衣にたちかふるもあはれに定めなき世のならひ今さら心うし御車に奉るとて日比おはしましたつる傍の障子に書きつけさせたまふいさ知らずなほうき方の又もあらば此宿とても忍ばれやせむ

【二七四】 御供には内侍の三位殿大納言君小宰相など男には行房の中將忠顯の少將ばかりつかまつるおのがじし都の名残どもいひ盡しがたし六波羅よりの御おくりの武士さならでも名あるつはものども千葉介貞胤を始めとしておぼえことなる限り十人選びて奉るいろの綾錦の水干直垂などいふものさまさまに織りつくし染めつくしていみじき清らを好みとのへたればかくてしも世に珍しき見物なり六波羅より七條を西へ大宮を南へ折れて東寺の門前に御車おさへらるとばかり御念誦あるべし物見車ところせきほどなりよろしき女房も壺装束などしてかちの者どももちまじれりわかきも老いたるも尼法師あやしき山がつまで立ちこみたるさま竹の林に異ならずおのおの目押しぬごひ鼻すすりあへるけしきども

げにうき世のきはめは今に盡しつる心地ぞする

【二七五】崇徳院の讃岐におはしましけむ程のありさま後鳥羽院の隠岐に遷らせ給ひけむ時などもさこそはありけめなれどつてにのみ聞きて見ねば知らずこれを始めたる心地ぞする日比は何の御にほひにもふれず數ならぬ人及ばぬ身までも今日の御別のあはれさなべておき所なげにぞ惑ひあへるかし君も御簾少しかきやりてこのもかのも御覽じわたしつつ御目とまらぬ草木もあるまじかめり岩木ならねば武士の鎧の袖どももしほとけげにぞ見ゆる都の梢をかくるまで御覽じおくるも猶夢かと覺ゆ鳥羽殿におはしましつきて御よそひあらため破子などまゐらせけれど氣色ばかりにてまゐらずこれより御輿にたてまつれば留るべき御前どもの空しき御車を泣く泣くやりかへるとてくれまどひたる氣色いと堪へ難げなり

【二七六】かくて君は遙かに赴かせ給ふ淀のわたりにてむかし八幡の行幸ありし時橋わたしの使なりし佐々木の佐渡の判官といふもの今は入道して今日の御おくり仕れるにその世の事思し出でられていと忍びがたさにたまはせける

しるべする道こそあらずなりぬとも淀のわたりは忘れしもせじ

【二七七】又の日は中務のみこ土佐の國へおはします御供に爲明中將まる日比かくあやしき御やどりにもし給ふを辱く思ひ聞えつるに遙かなる世界にさへゐておはしませばましていかさまなるわざをして御覽せさせむとあるじ時信けいめいしさわぐ宮既にたたせ給ふとて瓶にさしたる花を折らせ給ひて

花はなほとまるあるじにかたらへよわれこそ旅にたち別るとも
同じ日やがて妙法院の座主尊澄法親王も讃岐國へおはします

【二七八】先帝は今日津の國こや野の宿といふ所に着かせ給ひて夕づく夜ほのかにをかしきをながめおはします
いのちあればこやの軒端の月も見つまたいかならむ行末のそら

こや野より出でさせたまひて武庫川神崎難波住吉など過ぎさせ給ふとて御心のうちに思す筋あるべし廣田の宮のわたりにても御輿とどめて拜み奉らせ給ふ

【二七九】 あしやの里すずめの松原布引の瀧など御覽じやらるるもふるき御幸どもおぼし出でらる生田の森をばとはで過ぎさせたまひぬめり湊川の宿につかせ給へるに中務宮はこやの宿におはしますほど間近く聞き奉らせ給ふもいみじう哀にかなし宮

いとせめてうき人やりの道ながらおなじとまりと聞くぞ嬉しき福原の島より宮は御船にたてまつる

【二八〇】 御門は和田の岬刈藻川をうちわたして須磨の關にかからせ給ふかの行平の中納言關ふきこゆるといひけむは浦よりをちなるべしあはれに御覽じ渡さる源氏の大將のなく音にまがふと宣ひけむ浦浪今もげに御袖にかかる心地するもさまざま御涙のもよほしなり播磨の國へ着かせ給

ひて鹽屋垂水といふ所をかしきを問はせたまへばさなむと奏するに名を聞くよりからき道にこそと宣はせてさしのぞかせ給へる御さまかたちふりがたくなまめかしけぢかきかぎりはあはれにめでたうもと思ひ聞ゆべし

【二八一】 大くら谷といふ所少し過ぐる程にぞ人磨のつかは有りける明石の浦を過ぎさせ給ふに島隠れ行く船どもほのかに見えてあはれなり水の泡の消えてうき世をわたる身のうらやましきはあまの釣船

【二八二】 野中の清水ふたみの浦高砂の松など名ある所々御覽じわたさるるもかからぬ御幸ならばをかしようもありぬべけれどよろづかきくらす御みだり心地に御目とまらぬも我ながらいたうくむじにけるかなと思さるいと高き山の峯に花面白く咲き續きて白雲をわけ行く心地するも艶なるに都の事数々思し出でらる

花はなほうき世もわかずさきてけり都もいまやさかりなるらむ

あと見ゆる道のしをりのさくら花この山人のなさけをぞ知る

【二八三】 十二日に加古川の宿といふ所におはします程に妙法院宮讚岐へ渡らせ給ふとて同じ道少しちがひたれどこの川の東野口といふ所まで参り給へるよし奏せさせ給へばいとあはれに相見まほしう思さるれど御送のつはものどもゆるし聞えねば宮空しく歸らせ給ふ御心のうち堪へがたく亂れまさるべしさらなる事なれどかばかりの事だに御心に任せずなりぬる世の中いへばえにつらく恨めしからぬ人なし

【二八四】 十七日美作の國におはしまし着きぬ御心地なやましくてこの國に二三日やすらはせ給ふほどかりそめの御やどりなればもの深からで候ふかぎりの武士どもおのづからけ近く見奉るをあはれにめでたしと思ひ聞ゆ君も思しつづくる事ありて

あはれとは汝も見らむ我が民と思ふところは今もかはらずおはしますに續きたる軒のつまより煙の立ち來ればいほりにたけるとう

ち誦せさせ給へるも艶なり

【二八五】 二十一日雲清寺といふ所にていとおもしろき花を折りて忠顯少將奏しける

かはらぬをかたみとなして咲く花の都は猶もしのばれぞする御かへし

色も香もかはらぬしもぞうかりける都の外のはなのこずゑは又小山の五郎とかやいふ武士に同じ花を遣るとて少將
うき旅と思ひは果てじひと枝の花のなさけのかかるをりには

【二八六】 かくてなほおはしませば來し方はそこはかとなく霞みわたりてあはれに遠くも來にけるかなと日數にそへて都のいとど隔たりはつるも心細う思さるほのかに咲きそむと見えし花の梢さへ日數も山も重なるにそへてうつろひまさりつつ上り下るつづらをりにいと白く散り積りてむら消えたる雪の心地す

花の春また見むことの難きかなおなじ道をばゆきかへるともいと難しとは思すものから猶さりととも平かにだにあらばおのづから御本意遂ぐるやうもありなむなど御心もて慰め思すもはかなし

【二八七】 久米のさら山といふ所越えさせ給ふとて

聞き置きし久米のさら山越えゆかむ道とは兼て思ひやはせし逢坂といふは東路ならでもありけりと聞しめして

立ちかへり越えゆく關と思はばやみやこにききしあふ坂の山

三日月の中山にて昔後鳥羽院の仰せられけむ事思し出づるさへげにうかりけるためしなり

傳へきく昔がたりぞ憂かりけるその名ふりぬるみかづきの森

【二八八】 御道なかばになりぬれば御送のものども上下都出でしよりもなほ花やかに今めかしうさうぞきかへたり大方はあやしうさまことなる御幸なれど道すがらの御まうけ國々に心づかひしたる氣色などはかうさま

の御ありきとは見えすいとやむごとなくなむさはいへど今まで國のあるじにて世をもいみじう治めさせ給へりける名残にやあらむいとねむごろにのみ仕うまつれり古への御幸どもにはかやうはあらざりけりとぞ古き事知れる人々いひ侍りける四月一日の頃百敷の宮の中思し出でられて
さもこそは月日もしらぬ我ならめ衣更せし今日にやはあらぬ

【二八九】 出雲國やすぎの津といふところより御船にたてまつる大船二十四艘小船どもは數も知らず續きたり遙におし出すほど今一かすみ心細うあはれにて誠に二千里の外の心地するも今さらめきたりかの島におはしましつきぬ昔の御跡はそれとばかりのしるしだになく人のすみかもまれにおのづから蚤の鹽やく里ばかりはるかにいていとあはれなるを御覽するにも御身の上はさしおかれてまづかの古への事思し出づかかる所に世をつくし給ひけむ御心のうちいかばかりなりけむと哀にかたじけなくおぼさるるにも今はた更にかくさすらへぬるも何により思ひたちし事ぞかの御心の末やはたし遂ぐると思ひし故なり苔の下にもあはれと思さるらむ

かしとよろづにかき集め盡きせずなむ

【二九〇】海づらよりは少し入りたる國分寺といふ寺をよろしき様にとり拂ひておはしまし所に定む今はさはかくてあるべき御身ぞかしと思ししづまる程猶夢の心地していはむ方なしそこら参りし武士共もまかづればかいしめりのどやかになりぬるいとど心細し昔こそ受領どもも任のほどその國をしたため行ひしかこの頃は只名ばかりにて何處にも守護といふものの目代よりはおぞましきを据ゑたれば武家のまびきにてのみおほやけざまの事はよろづおろそかにぞしける葛城の大君を陸奥國へ遣したりけむもかくやとあはれなり

【二九一】中務の御子も土佐におはしまし着きて御送りの武士にたまはせける

思ひきやうらめしかりし武士のなごりを今日は慕ふべしとはかやうのたぐひあまた聞えしかど何かはさのみ皆人もゆかしからず思さ

るらむとてなむ

【二九二】都には三月二十二日御即位の行幸なれば世の中めでたくのしる本院新院一つに奉りて待賢門のほとりに御車立てて見奉らせ給ふよろづあるべきさまにととのほりてめでたし

【二九三】かしこに参り給へる内侍三位の御腹にも御子たち數多おはします何れもいまだいわけなき御程にはあれど物思し知りていみじう戀ひ聞え給ひつつをりをりは忍びてうち泣きなどし給ふ稚うものし給へば遠き國までは遷し奉らねどもとの御後見をば改めて西園寺大納言公宗の家にぞ渡し奉る八になり給ふぞ御このかみならむかし北山におはするほど夕暮の空いと心すごう山風あららかに吹きて常よりも物悲しく覺されければ

庭松緑老秋風冷 菡竹葉繁白雪埋

つくづくとながめくらしして入相の鐘のおとにも君ぞ戀ひしき

稚き御心にもはかなくうちひそみ給へるいと哀なりこころもかしこも盡き
せず思し歎くさまいはずとも皆推し量るべし

【二九四】 今年は祭の御幸あるべければめづらしさに人々常よりも物見車
心づかひしてかねてより棧敷などもいみじう造れり使どももいかで入に
まさらむとかたみにいどみかはすべし本院新院廣義門院一品宮も忍びて
入らせ給ふなどぞ聞えし御車寄には菊亭の右の大臣の御子實尹の中納言
参りたまへり殿上人もよき家の君達ども色ゆりたる限りいと清らに好ま
しう出でたちつかうまつれり御隨身なども花を折れるさまなり出車にい
ろいろの藤つつじ卯花撫子燕子花などさまさまの袖口こぼれ出でたるい
と艶になまめかし

【二九五】 祭など過ぎて世の中のどやかになりぬる程に先帝の御供なりし
上達部ども罪重きかぎり遠き國々へ遣しけり洞院按察大納言公敏頭おろ
して忍び過されつるもなほゆり難きにや小山の判官秀朝とかやいふもの

具して下野國へと聞ゆ

【二九六】 花山院大納言師賢は千葉介貞胤うしろみて下總國に下る五月十
日あまりに都出でられけり思ひかけざりし有様どもいみじともさらなり
別るともなにか嘆かむ君すまで憂きふる里となれるみやこを

北方は花山院入道右大臣家定の御女なりその御腹にも又異腹にも君達あ
またおはすれどそれまでは流されず上のいみじう思ひ歎き給へるさま哀
に悲しけれど今はかぎりの對面だにも許されねばはるくる方なく口惜し
くよろづに思ひめぐらされていと人わろし

今はとて命をかぎる別れ路はのちの世ならでいつをたのみむ

【二九七】 源中納言具行もおなじ頃東へゐて行くあまたの中にとりわきて
重かるべく聞ゆるはさまことなる罪にあたるべきにやあらむ中納言はも
のにもがなやとくやしうはしたなき事のみぞ底にはちぢに碎くめれどめ
めしう人に見えじと思ひかへしつつつれなく作りて思ひ入りぬるさまな

り去年の冬頃あまた聞えし歌の中に

ながらへて身はいたづらに初霜の置く方知らぬ世にもふるかな
今ははやいかになりぬる憂身ぞとおなじ世にだに問ふ人もなし

【二九八】 佐々木佐渡判官入道伴ひてぞ下りける逢坂の關にて

かへるべきときしなればこれやこの行くをかぎりの逢坂の關
柏原といふ所に暫しやすらひてあづかりの入道まづ東へ人を遣したる返
事待つなるべしその程物語などなさけなさけしううちいひかはして何事
もしかるべき前の世の報いに侍るべし御身一つにしもあらぬ身なればま
してかひなきわざにこそかくたけき家に生れて弓箭とるわざにかかづら
ひ侍るのみうきものに侍りけれなどまほならねどほのめかすに心えはて
られぬ

【二九九】 隱岐の御送りをもつかまつりしものなれば御道すがらの事など
語り出でてかたじけなういみじうも侍りしかなまして朝夕近う仕う奉り

なれ給ひけむ御心どもさながらなむ推し量り聞えさせ侍りし何事も昔に
及びめでたうおはしましし御事にて世下り時衰へぬる末にはあまりたる
御ありさまにやかくもおはしますらむとさへせめては思ひたまへよらる
るなど大方の世につけてもげにと覺ゆるふしぶし加へてのどやかにいひ
をるけはひおのがほどにはすぎにたる御酒など所につけてことそぎあら
あらしけれどさる方にしなしてよきほどにてくだしつる東よりの使歸り
來たるけしきしるけれどことさらにいひ出づる事もなしかならむと胸
うちつぶれて覺ゆるもかつはいと心弱しかし

【三〇〇】 いづくの島守となれらむ人もあぢきなくたれも千年の松ならぬ
世になかなか心づくしこそまさらめ遂に遁るまじき道はとてもかくても
おなじ事そのきは心亂れなくだにあらばすすしき方にも赴きなむとお
もふ心は心として都の方も戀しうあはれにさすがなる事ぞ多かりける

【三〇一】 よろづにつけて事の氣色を見るに行末遠くはあるまじかめりと

さとりぬあづかりがほのめかししも情ありて思ひ知らずれば同じうはと思ひて又の日頭おろさむとなむ思ふといへばいとあはれなる事にこそ東の聞えやいかがと思ひ給ふれどなむでふことかはとてゆるしつかくいふは六月の十九日なり

【三〇二】 かの事は今日なめりと氣色見知りぬ思ひまうけながらも猶ためしなかりける報いのほどいかか浅くはおぼえむ

消えかかる露の命のはては見つさてもあづまの末ぞゆかしき

猶も思ふ心のあるなめりと憎き口つきなりかしその日の暮つかた終にそこにて失はれにけり今はのきはもさこそ心の中はありけめどいたく人わろうもなくあるべき事ども思へるさまになむ見えける内侍の待ち聞く心地いかばかりかはありけむやがてさまかへて近江國高島といふわたりに昔のゆかりの人々尊く行ひて住む寺にぞたち入りぬる

【三〇三】 萬里小路中納言藤房は常陸國につかはさる父の大納言母おもと

など老の末に引き別るる心地どもいへばさらなり身にかへてもとどめまほしう思へどかひなし弟の季房の宰相も頭おろしたりしかど猶下野國へ流さる平宰相成輔は東へと聞えしかどそれも駿河國とかやにて失はれける

【三〇四】 又元亨の亂のはじめに流されし資朝の中納言をも未だ佐渡の島に沈みつるをこの程のついでにかしこにて失ふべきよしあづかりの武士に仰せければこの由を知らせけるに思ひ設けたるよしいひて都にとどめける子の許にあはれなる文かきてあづけけり既に斬られけるときの頌とぞ聞き侍りし

四大本無主五蘊本來空將頭傾白及但如鑽夏風
いと哀にぞ侍りける俊基も同じやうにぞ聞えし

【三〇五】 かくのみ皆様々に罪にあたり遠き世界にはなち捨てらるるおのおの思ひ歎けども筆にも及び難し大塔の尊雲法親王ばかりは虎の口を遁

れたる御さまにてここかしこさすらへおはしますも安き空なくいかで過しはつべき御身ならむと心苦しく見えたり

【三〇六】 隠岐の小島には月日経るままにいと忍びがたう思さるる事のみぞ數添ひけるいかばかりのおこたりにてかかるうきめを見るらむと前の世のみつらく思し知らるるにもいかでその事をも報いてむと思して打ちたえて御いもひにて朝夕勤め行はせたまふ法のしるしをも試がてらとかつは思すなるべし自ら護摩などもたかせ給ふにいと頼もしき事夢にも現にも多くなむありける

【三〇七】 つれづれに思さるる折々は廊めく所に立ち出でさせ給ひて遙に浦のかたを御覽じやるにあまの釣船ほのかに見えて秋の木の葉の浮べる心地するもあはれにいくをさしてかと思さる

心ざすかたを問はばや浪のうへにうきてただよふあまの釣船
浦こぐ船のかちを絶えとうち誦じて御涙のこぼるるを何となく紛はし給

へるいふよしなく心深げなりねび給ひにたれどなまめかしうをかしき御さまなれば所についてはましてやむごとなきあたらしさを自らいとかたじけなしと思さる

【三〇八】 京には十月になりて御禊大嘗會などのいそぎに天の下物さわがしう内藏寮内匠寮うち殿染殿何くれの道々につけてかしがましうひびきあひたるも片つ方は涙のもよほしなり悠紀主基の御屏風の歌人々に召さる書くべきものなければかしこへ參れる行房中將をや召しかへされましなど定めかね給ふをまだきに傳へ聞しめしければ夜居の間のしづかなるに御前にことに人もなくこの朝臣ばかりさぶらひて昔今の御物語したまふついでに都にいふなる事はいかがあらむとすらむさもあらばいとこそ羨しからめとうち仰せられて火をつくづくとながめさせ給へる御まみの忍ぶとすれどいたうしぐれさせ給へるを見奉るに中將も心づよからずいと悲し

【三〇九】 いかばかりの道ならばかかる御有様を見おき聞えながらうきふる里にはいかで歸らむと思ふもえ聞えやらす後夜の御行にさながらおはしませば潮風いと高う吹きくる霰の音さへ堪へ難く聞えていみじう寒き夜の氷をうち叩きて闕伽たてまつるも山寺の小法師ばらなどの心地ぞするや少將この中將など櫛折りて參れるも何時ならひてかと哀に御覽せらる今一度いかで世を御心にまかするわざもがなと人の心のけぢめわかるるにつけても深う思しまさる事のみ數しらす

【三一〇】 まことやこの卯月の頃より年の名かはりしぞかし正慶とぞいふなる大塔の法親王楠木の正成などは猶同じ心にて世を傾けむ謀をのみめぐらすべし正成は金剛山千早といふ所にいかめしき城をこしらへてえもいはず武きものども多く籠り居たりさて大塔の宮の令旨とて國々の兵をかたらひければ世にうらみある者などここかしこに隠るへばみてをるかぎりはおつまりつどひけり

【三一】 宮は熊野にもおはしましけるが大峯を傳ひて吉野にも高野にもおはしまし通ひつつさりぬべきくまぐまにはよく紛れものし給ひてたけき御ありさまをのみ顯し給へばいとかしこき大將軍にていますべしとて附き随ひ聞ゆるものいと多くなり行きければ六波羅にも東にもいと安からぬ事ともてさわぎて猶かの千早を攻め崩すべしと云へばつはものなど上りかさなると聞ゆ

【三二】 正成は聖徳太子の御堂の前を軍のそのにして出で合ひかけひき寄せつ返しつ潮のみちひく如くにて年はただ暮れに暮れ果てぬれば春になりて事どもあるべしなどいひしろふもいとむづかしう心ゆるびなき世のありさまなり

【三三】 さて日野大納言俊光といひしは文保の頃始めて大納言になりにしをいみじき事に時の人いひ騒ぐめりしにその子この頃院の執權にて資名といふまた大納言になりぬめでたく度をさへ重ねぬるいといみじか

めりさきの御代にも定房一品し宣房大納言になされなどせしをばかうざ
まにぞ人思ひいふめりし

第二十 月草の花

【三二四】かの島には春來てもなほ浦風さえて浪荒く渚の氷もとけがたき
世のけしきにいとと思しむすぼる事つきせすかすかに心細き御すまひ
に年さへ隔りぬるよとあさましく思さる候ふ人々もしばしこそあれいみ
じくくむじにたり

【三二五】今年は正慶二年といふ閏二月あり後のきさらぎの初めつ方より
とりわきて密教の祕法を試みさせ給へば夜も大殿ごもらぬ日數へてさす
がにいたうこうじ給ひにけり心ならずまどろませ給へる曉方夢現ともわ
かぬ程に後宇多院ありしながらの御面影さやかに見え給ひて聞え知らせ
給ふこと多かりけりうちおどろきて夢なりけりと思すほどいはむ方なく

名残かなし御涙もせきあへずさめざらましをとおぼすもかひなし源氏の
大將須磨の浦にて父御門見奉りけむ夢の心地し給ふもいとあはれに頼も
しういよいよ御心強さまさりてかのしぼちが御むかへのやうなる釣船も
たより出で來なむやと待たるる心地し給ふに大塔の宮よりもあま人のた
よりにつけて聞え給ふ事絶えず

【三二六】都にも猶世の中しづまりかねたるさまに聞ゆればよろづに思し
慰めて關守のうち寝るひまをのみうかがひ給ふにしかるべき時の到れる
にや御垣守にさぶらふつはものどもも御氣色をほの心えて靡きつかうま
つらむと思ふ心つきにければさるべき限り語らひ合せて同じ月の二十四
日のあけほのいみじくたばかりてかくろへゐて奉るいとあやしげなる
蜚の釣船のさまに見せて夜深き空の暗きまぎれにおし出だす折しも霧い
みじうふりて行くさきも見えずいかさまならむと危けれど御心をしづめ
て念じ給ふに思ふ方の風さへ吹きすすみてその日の申の時に出雲の國に
着かせ給ひぬここにぞ人々心地しづめける

【三二七】同じ二十五日伯耆國稻津浦といふ所へ遷らせたまへりこの國に奈和の又太郎長年といひてあやしき民なれどいとまうに富めるが類ひろく心もさかさかしくむねむねしきものあり彼がもとへ宣旨を遣し給ひたるにいとかたじけなしと思ひてとりあへず五百餘騎の勢にて御迎にまゐれり又の日賀茂の社といふ所にたち入らせたまふ都の御社思し出でられていと頼もしそれより船上寺といふ所へおはしませせて九重の宮になすらふこれよりぞ國々のつはものどもに御敵を亡すべきよしの宣旨遣はしける比叡の山へものぼらせられけり

【三二八】かくて隱岐には出でさせ給ひにし晝つ方より騒ぎあひて隱岐の前の守追ひて參るよし聞ゆればいとむくつけく思されつれどここにもその心していみじう戦ひければ引き返しにけり京にも東にも驚き騒ぐさま思ひやるべし正成が城の圍みにそこの武士どもかしこに集ひをるにかかる事さへ添ひにたればいよいよ東よりも上り集ふめり

【三一九】三月にもなりぬ十日あまりのほど俄に世の中いみじうののしる何ぞと聞けば播磨の國より赤松なにがし入道圓心とかやいふもの先帝の勅に従ひて攻め來るなりとて都の中あわてまどふ例の六波羅へ行幸なり兩院も御幸とて上下たち騒ぐ馬車走りちがひ武士どものうち込みののしりたるさまいと恐しされど六波羅の軍強くてその夜は彼の者ども引き返しぬとて少し静まれるやうなれどかやうにいひ立ちぬれば御心ゆるびなきにやそのまま院も御門もおはしませば春宮も離れ給へるよろしからぬ事とて二十六日六波羅へ行啓なる内の大臣御車にまゐりたまふ傳は久我の右の大臣にいますれど大かたの儀式ばかりにてよろづこの内大臣御後見つかまつり給へばいまだきびはなる御程をうしろめたがりて宿直にもやがて候ひ給ふ御修法のために法親王たちも候はせ給へり

【三二〇】ここもかしこも軍とのみ聞えて日數經るに院よりの仰せとて上達部殿上人までもほどほどに隨ひてつはものを召せば弓ひく道もおぼおぼしき若侍などをさへぞ奉りけるげにひぢ折りぬべき世の中なりかやう

にいひしろふ程に三月も暮れぬ

【三三二】 卯月の十日あまり又あづまよりものふ多く上る中に一昨年笠置へも向ひたりし足利の治部大輔源高氏のぼれり院にも頼もしく聞しめしてかの伯耆の船上へ向ふべきよし院宣たまはせけり東を立ちし時もうしろめたく二心あるまじきよしおろかならず誓言文を書きてけれども底の心やいかがあらむとかく聞ゆるすぢもありけり

【三三三】 この高氏は古への頼義朝臣の名残なりければもとの根ざしはやむごとなき武士なれど承久よりこのかた頭さし出す源氏もなくてうづもれ過しながら類ひろく勢四方にみちて國々に心よせのもの多かればかやうの國の危き折をえて思ひたつ道もあらむなど下にさざめくもしるくぞ見えし伯耆國へ向ふべしといひなしてまづ西山大原わたりに一とまりして五月七日ほのぼのと明るるほどより大宮の木戸どもを押開きて二條より下七條の大路を東ざまに七手に分れて旗をさし續けて六波羅をさして

雲霞の如くたなびき入るに更におもてをむかふるものなしこの治部大輔はやうより先帝の勅を承りてければさかさまに都を亡さむとするなりけり

【三三三】 関つくとかやいふ聲は雷の落ちかかるやうに地の底もひびき梵天の宮の中も聞き驚き給ふらむと思ふばかりとよみあひたるさま來しかた行くさききくれて物覺ゆる人もなし御門春宮院のうへ宮たちなどまして一人さかしきもおはしまさず絲竹のしらべをのみ聞し召しならひたる御心どもにめづらかに疎ましければただあきれ給へり武士ども半をわけて金剛山へむかひたればさならぬ残り都にあるかざりは戦をなす今をかざりの軍なれば手をつくしてののしる程まねびやらむ方なし雨の脚よりも繁く走りちがふ矢にあたりて目の前に死をうくるもの數を知らず一日一夜いりもみとよみ明かすに兩六波羅にも残る手なく防ぎつれど遂に陣の内破られて今はかくと見えたり

【三二四】 日比さぶらひ籠り給へる上達部殿上人なども今日と思ひ設けたらむだに君のおはしまさむ限りはいかでかまかでも散らむましてかねてよりかく構へけるをも知しめさで昨日かとよ當代の宣旨を賜りしもののかくうらがへりぬれば誰か思ひ寄らむすべて上下となく一つに立ち込みてあわて惑ひたり

【三二五】 日暮し八幡山崎竹田宇治勢多深草法性寺など燃えあがる煙ども四方の空にみちみちて日の光も見えず墨を磨りたるやうにて暮れぬここにも火かかりていとあさましければいみじう固めたりつる後の陣を辛うじて破りてそれより免れ出でさせ給ふ御心地ども夢路を辿るやうなり内のうへもいとあやしき御姿にことさらやつし奉るいとまがまがし兩院も御手をと리카はすと云ふばかりにて人に扶けられつつ出でさせ給ふ上達部大臣たちは袴のそばとりて冠などの落ちゆくも知らず空をあゆむ心地してあるは河原を西へ東へさまざまちりぢりになりたまふ

【三二六】 兩六波羅東をさして東へと心がけて落ちければ御幸もおなじさまになし奉りけり西園寺の大納言公宗は北山へおはしにけり右衛門督經顯左兵衛督隆蔭資明の宰相などは御幸の御供に參る按察の大納言資名は足をそこなひて東山わたりに留まりぬなど言ひしはいかがありけむ内大臣殿は御子の別當道冬を伴ひ給ひて八日のあけぼの未だ暗き程に我が御家の三條坊門萬里小路におはしましつきたるに歩み入り給ふ程も心もとなくて北方門へ走り出でて平かに歸りおはしたると思ふうれしさに急ぎて見れば大臣は御直衣に指貫ひきあげ給へばしるく見え給ふ別當は道の程のわりなきに折烏帽子に布直垂といふ物うち着て細やかに若き人の御前どもに紛れたればとみにも見えす火などもわざと無ければ暗きほどのあやめわかれぬにはやういかにもなり給へるにやと心地まどひて御方はいかにいかにと聲もわななきで聞えけるいとことわりにいみじう哀れなり

【三二七】 さて御幸は近江國におはします程に伊吹といふほとりにてなに

がしの宮とかや法師にていましけるが先帝の御心よせにてかやうの方もほの心え侍りけるにや待ちうけて矢を放ち給ふ又京よりも追手かかるなど聞えければ六波羅の北といひし仲時内春宮兩院具し奉り番馬といふ所の山のうちに入れ奉りぬ手のものどもも猶残りて随ひつきけれども戦もかなはずやありけむ遂にこの山にて腹切りにけりおなじき南時益と云ひしはこれまでも参らず守山の邊にて失せにけりとぞ聞えしあやなくいみじき事のさまなり

【三二八】御所々の御供には俊實の大納言經顯の中納言頼定の中納言資名の大納言資明の宰相隆蔭などぞ残りさぶらひける俊實資名頼定などはやがてそこにて髻切りてけり一院は歸り入らせたまふ御門に御文をたてまつり給ひて面々に御出家あるべしなどまで申されけれども思ひも寄らぬよしをかたく申され給ひけるとかや

【三二九】伯耆の御所へは人々まゐりつどふ上達部殿上人數しらするほ

どに東にもかねて心えけるにや高氏のすゑの一族なる新田小四郎義貞といふもの今の高氏の子四になりけるを大將軍にして武藏國より軍をおこしけりこの頃の東の將軍は守邦親王にておはします御後見つかまつる高時入道貞顯入道城介入道圓明長崎入道圓基などいふものども驚き騒ぎて高時入道の弟に四郎左近大夫泰家といひし今は入道したるをぞ大將に下しける五月十四日鎌倉を立ちて向ふその勢十萬餘騎高時入道の一族附き随ふものそこら満ちひろごりて鎌倉始まりし頼朝の世時政より今に至るまで多くの年月をつめり僅なる新田などいふ國人にたやすくいかでかは亡さるべきと覺えしに程なく十五日にかたき既に鎌倉に近づくよし聞えて家々を毀ち騒ぎののしる世の既に滅するにやと覺えしとぞ人はかたり侍りし

【三三〇】四郎左近大夫入道軍にうち負けけるにや随ふ武士ども残りなく新田が方へ附きぬればえさらぬ者どもばかり五六百騎にて十六日の夜に入りて鎌倉へ引き歸る僅に中一日にてかくなりぬる事夢かとぞ覺えしか

くて日々の軍にうち負けければ同じき二十二日高時以下腹切りてうせに
けり

【三三一】 さて都には伯耆よりの還御とて世の中ひしめくまづ東寺へ入ら
せ給ひて事ども定めらる二條の前の大臣召しありて参り給へりこたみ内
裏へ入らせ給ふべき儀重祚などにてあるべけれども璽の箱を御身にそへ
られたれば只遠き行幸の還御の儀式にてあるべきよし定めらる關白を置
かるまじければ二條の大臣氏長者を宣下せられて都の事管領あるべきよ
し承る天の下只この御はからひなるべしとてこのひとつあたり喜びあへ
り

【三三二】 六月六日東寺より常の行幸のさまにて内裏へぞ入らせ給ひける
めでたしとも言の葉なし去年の春いみじかりしはやと思ひ出づるもたと
しへなく今も御供の武士どもありしよりはなほ幾重ともなくうち圍み奉
れるはいとむくつけきさまなれどこたみはうとましくも見えず頼しくて

めでたき御まもりかなと覺ゆるもうちつけめなるべし世のならひ時につ
けてうつる心なればみなさぞあるらし先陣は二條富小路の内裏につかせ
給ひぬれど後陣の兵は猶東寺の門まで續きひかへたりしとぞ聞えしはま
ことにやありけむ正成も仕うまつれり

【三三三】 かの名和の又太郎は伯耆守になりてそれも衛府のものどもにう
ち交りたる珍らしくさまかはりて搖り満ちたる世の氣色かくもありける
をなどあさましくは歎かせ奉りけるにかとめでたきにつけても猶前の世
のみゆかし車などたち續きたるさまありし御くだりにはこよなく勝れり
物見ける人の中に

昔だにしづむうらみをおきの海に波たちかへる今ぞかしこき
昔の事など思ひ合するにやありけむ金剛山なりし東の武士どももさなが
ら頭を垂れて参りきほふさま漢のはじめもかくやと見えたり

【三三四】 禮成門院も又中宮と聞えさす六日の夜やがて内裏へ入らせ給ふ

いにし年御ぐしおろしにき御惱なほおこたらねばいつしか五壇の御修法はじめらる八日より議定行はせ給ふ昔の人々残りなく参りつどふ十三日大塔の法親王都に入り給ふこの月比に御ぐしおほしてえもいはず清らかなる男になり給へり唐の赤地の錦の御鎧直垂といふもの奉りて御馬にて渡り給へば御供にゆゆしげなる武士どもうち圍みて御門の御供なりしにもほとほと劣るまじかめり速かに將軍の宣旨をかうぶり給ひぬ流されし人々ほどなくきほひ上るさま枯れにし木草の春にあへる心地すその中に季房の宰相入道のみぞ預なりけるものの情なき心ばへやありけむ東のひしめきのまぎれに失ひてければ兄の中納言藤房は歸り上れるにつけても父の大納言母の尼上など歎き盡きせず胸あかぬ心地してけり

【三三五】 四條中納言隆資といふも頭おろしたりしました髪おほしぬもとより塵を出づるにはあらずかたきのために身を隠さむとてかりそめに剃りしばかりなれば今はた更に眉をひらく時になりて男になれらむ何の憚かあらむとぞおなじ心なるどちいひあはせける天台座主にていませし法親

王だにかくおはしませばまいとぞ誰にかありけむその頃聞きし

墨染の色をかへつ月くさのうつればかはる花のころもに

昭和九年二月三日印刷
昭和九年二月六日發行



編者及
發行者

塚本哲三

東京、淀橋、西大久保、二ノ三三六

發行所

古典書屋

東京、淀橋、西大久保、二ノ三三六

印刷者

小林清太郎

東京、神田、同朋町、二十一

東京、日本橋、通三丁目

發賣所

青野文魁堂

振替東京一五九二九

通觀增鏡讀本
定價金六十錢

終

